

(カ)

家庭・保育所・幼稚園

N24  
1  
67(2)  
1

# 幼児の教育

第六十七卷 第七号



お茶の水女子大学図書

和 昭  
44

46845

7

日本幼稚園協会

# フレーベル館保育図書新刊紹介

## 幼稚園教育入門

玉越三朗監修

東原岩男著

A5判192頁  
定価550円

現場の保育者の実践記録をもとに、幼稚園教育の内容をわかりやすく紹介した書。幼児教育の基本的な考え方から実践記録のとり方まで広く参考となる貴重な入門書です。

## 保育学年報（1967年版）

日本保育学会編

B5判256頁  
定価2300円

保育および保育学に関するその年度の動きをもれなく集録。学会における研究発表・遊具・絵本などの幼児文化財・保育関係図書目録・保育行政の動きなど価値ある資料を満載。特集は、「保育所保育指針の実践的批判」です。

## 幼児教育概説

坂元彦太郎著  
B6判256頁  
定価500円

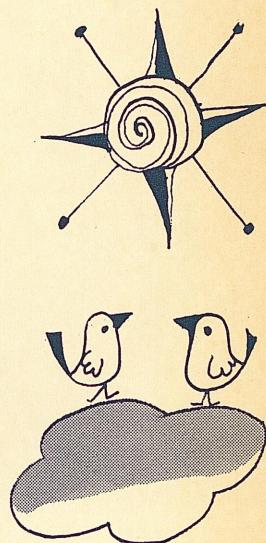
斯界の指導的立場にある著者が長年にわたる幼児教育者としての体験から、幼児の日常生活に焦点をあてて説いた教育論。幼児と保育者の日常生活を見つめ、保育者が見落としがちな幼児教育の本来あるべき姿を鋭くついています。

## 精神薄弱児教育の研究(2)

旭出學園教育研究所編

A5判224頁  
定価500円

精神薄弱児の身辺生活の自立と集團への参加、精神薄弱児の作業教育の評価、数量観念の発達について、きりがみあそびの比較検討など——幼児の段階での指導を考える上に非常なる参考となる諸研究も収載されています。



# 幼児の教育 目 次

—第六十七卷 七月号—

表紙 小坂しげる

## 現代の母親と教師(3)

眞実と愛の極み—教育の根源にあるもの

森田宗一 (2)

## 幼児の心のうきを理解する

篠崎忠男 (8)

## 集団の中で個性をどのように生かすか(1)

小松福三 (12)

## 保育界の忘れられない人

倉橋惣三先生

上澤謙二 (18)

## 五歳児の一学期の遊び

鈴木洋子 (20)

## 一学期の遊びから

長谷川美代子 (25)

## 一学期の幼児の遊びから

長山篤子 (28)

## 保育の過程(3)

津守真 (34)

## 幼児のためのよみもの(その1)

本田和子 (40)

## 「幼年童話」の問題

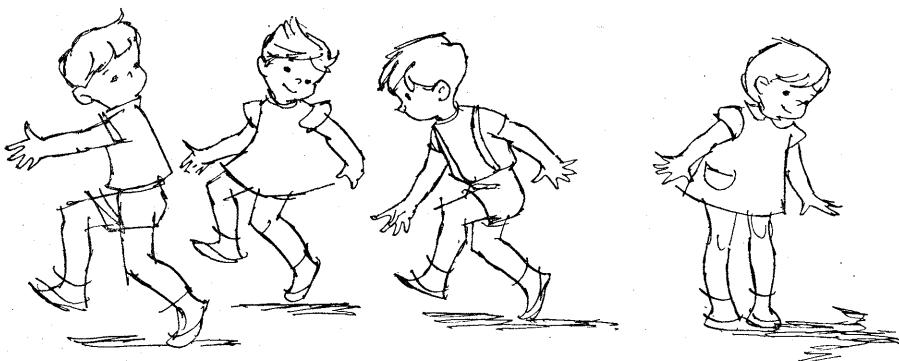
中村道子 (47)

## 愛珠・想い出するままに(4)

高橋滋子 (53)

## 「三重県幼稚園カリキュラム資料集」を読んで

磯部景子 (56)



## 真実と愛の極み

—教育の根源にあるもの—



宗田一

(一)

精薄や貧しき人々がうとまれず

幼きころより、この人々にも

正しき導きと神のみ恵が与えられ

死刑が廃止されても、犯罪なき

平和な世の中がうちたてられますように  
わたくしにもましてつらき立場の人々の上に  
み恵みのあらんことを

この澄めるこころ在るとは識らず来て

刑死の明日に迫る夜温し

これは過ぐる年の十一月二日、ながい死刑囚としての未決生活を終え処刑された島秋人（ベンネーム）が、処刑台でなした祈りのことばである。

澄みに澄みゆく心境をすばらしい短歌に託して多くの人を感動させ、その日常生活において、いつもやさしく心情をもって、その接する人々にも小鳥や草木にも純真な愛を与えていた彼が、愈々明日処刑と知られたときも從容として次の歌を作ったという。

土ちかき部屋に移され処刑待つ

ひととき温<sup>ぬく</sup>きいのち愛<sup>いと</sup>しむ

教育にたずさわる人々に、ぜひ一読を得たいと洩らしていた

ほんとに人間の教育にたずさわる者が一読し、人間の可能性のすばらしさおそろしさ、教育（師）が人間を悪くもよくもすること、人ととの出会いということがいかに不思議なものであるか、深く考えてみるべきである。

処刑直前、役目がら立会っている人々にも心からの礼とわびの言葉を述べ、被害者の家族にもひたすら罪を悔いていたことをくりかえし、最後のおわびのことばを書き残し、処刑台において死の寸前に冒頭の祈りをなして生を終えたとのこと。わたくしはそのことを東京拘置所長からつぶさに聞き、感動に激しく胸をふるわせた。

島秋人についてはすでに知る人ぞ知るであるし、その処刑直後

島秋人は昭和九年六月二八日生、幼少を満州で育ち、戦後父母とともに新潟県柏崎に引き揚げたが、母は疲労から結核になり間もなく亡くなつた。本人も病弱で結核やカリエスになり、七年間もギブスをはめて育つたという。

出版された「遺愛集」（東京美術）は、島秋人獄中八年の歌集であるとともに、人間の魂が闇から光に転化するまことにすばらしい厳そかな遍歴の記録である。罪にうごめく一人の人間の苦惱から光明への苦渋に満ちた旅路、その間に出会い触れ合う人々との手記や手紙や記録。それらのすべてが嚴そかなまでの人間教育の明暗を物語るものである。偉大な教育の書だといえよう。

歌の先生である窪田章一郎氏も「遺愛集」の「後記」にこう書いておられる。「島君は少年時代からの人生をかえりみ、いかに教育が大切であるかを痛切に感じ、歌集刊行のあかつには、

浮浪非行のあげく久里浜特別少年院にも入れられた。その後も生活の安定を得ず、温くうけ入れてくれる人も家もなく、犯罪をくりかえした。そのあげく昭和三四年雨の夜、郷里にちかい新潟

県小千谷市を徘徊するうち、飢えにたえかねて農家に押し入り二千円を奪い、争つてその家のを殺し、強盗殺人犯として検挙され、裁判の結果死刑の判決をうけるに至った。控訴上告したが容れられず、遂に昭和三七年六月死刑確定、ながい未決生活の末、前記のように昨年十一月処刑されたのである。

荒れに荒れ、すさびにすさんでいた彼であつたが、ある人と再会して新しい生へ目ざめ、あることを契機として短歌に精進し、人間としての生の再発見をし、常人の至り難き境地に到達したのである。

## (二)

私が本稿で語りたいのは、闇にうごめく人間の光への転機となつたそのある機縁、ある人との再会のことである。それはいつの世も変わらぬ教育の根本精神であり、真の母的なものの教育的表现である。また人ととの出会いの秘義である。

島秋人は死刑判決をうけたのち、思い出したのは中学の頃たつた一度だけほめられたという記憶である。それを忘れかね、そのほめてくれた图画の先生に獄中から手紙を出した。ところがその

先生の奥さんが短歌をなさり、歌を通じて文通・交渉が始まつた。爾来八年、師弟（正確にいえば先生とくにその夫人とかつての教え子である死刑囚）の温い美しい交わりが続いたが、それは目をみはるばかりである。

私の筆でそれを説明するよりも、その先生の奥さんの短歌をここに紹介させていただくのが眞実を正しく伝えることと思う。これは最近その奥さんから私への手紙に添えてあつた数々の歌の中のいくつかなのである。彼は毎日新聞歌壇において、すぐれた歌を発表し、窪田空穂先生というよき短歌の道の師を得、歌境する進んだが、手ほどきをしてくれた图画の先生の奥さんの歌風の影響は、最後まで残つていたように感じられる。

图画の時間にはめられし夫を忘れかね便りくれしに汝  
は死刑囚

何によりて余命生くるや死刑囚の教え子に歌を詠めと  
文書く

教え子の死刑の罪を詫びなんと來し被害者の家はくず  
屋根

寒き夜は心なやみて眠られずすぐすと聞けばわれも眠

れず

汝が死刑ついに確定となりし日の放心の日よ馬鈴薯の

花

今生に生をうけたる幸せを知らで死なせまじと歌すす

め来し

秋づけば淋しからぬや冬くれば獄寥からんとすぎしハ

年

歌により目ざめし感謝つきぬと吾れへの遺言聞きて泣

きけり

処刑されし教え子に代り被害者に詫びる言葉にわれは

つまりつ

処刑の朝したためし汝が詫び状に添えて香華の資をお

くるわれ

過去を思わず未来も問わで今日一日よく生きなんと被

害者の文あわれ

これらの歌を通読しただけでも、教育の心、いのりをこめた母

的な教育愛が測々と迫るのを感じることができる。この歌を添え

て私宛にくれたその奥さんのお手紙は、そのことをあまりにも痛

切に教えてくれる。私信をここに多く引用するわけにはいかないが、こんな一節も感動を禁じ得ないところである。

「歌によつて目ざめた覚さん（島秋人の本名）が、遂に私共の至り得ぬ境地に至り、生命愛惜の人間性豊かな歌をうたいあげてくれましたことは、私共のつきせぬようこびでございました。私どもにとりまして覚さんは肉親も同様、処刑を知らされました時は、数日食事ものどを通らぬ思いを致しましたが、『歌』によつて目ざめた自分は本当に幸せであった。この感謝の気持を必ず伝えてほしい』という遺言を聞き慰められました。まさに人と人との出会いほど人生において不思議なもののはございません。覚さんとの深い縁によつて、覚さんをめぐる多くの心あたたかい方々とお知り合いになることも出来ました。覚さんのお蔭という外ございません。……思えば多くの方々の愛をうけ、深い心の交りをもつた覚さんは本当に幸せでございました。一生の半分以上、十八年という長い歳月を少年院獄中ですごし、人並の幸せとは遠くかわいそうな覚さんでしたが、最後に鈴木和子さんと結ばれたことも神の深いお褒めしと思われます」

### (三)

さてここに出てくる鈴木和子さんとは、島秋人と歌を通じて深く知り合い一度も相会わないので魂の交流を感じ結婚しようとうところまで至った一婦人のことである。しかも十二年前に盲目になり、結核の身を療養所のベットに横たえながら、清く気高い心の生活を続けていた方である。

その一婦人と島秋人との間の真美に満ちた愛と希望の消息は、これまた今日の世にあまりに欠けたものである。昨年島秋人処刑の直後、私はこの婦人から思いがけない手紙をうけとり、大きな感動をうけ、五十余年の生涯に一転機を画されたように感じたことである。

その手紙の一節そしてながい文面の要点は、次のようなことである。

「さて彼は亡くなる（処刑される）少し前、私が歩行訓練を許されるようになつたと知らせましたら、早速ひとに頼みあたたかいスリッパを送つてくれました。それ程に優しく気のつく人だつたのです。またそのあとすぐ何か栄養のある物をたべるよ

うにと自分の乏しい小遣いの中から二千円を送つてくれたのです。私は勿体なくてつかわずにとつておいたのですが、彼のあたかい心をうけて最近バター、チーズなど買わせてもらいました。でもふと彼の心のこもったこの金の一部を何か有意義につかいたいと思いつきいろいろ考えたのですが、三十三歳という若さと健やかな体のまま処刑台に消えた愛する彼を思うにつけ、やはり私として前途ある若い人が殺人という大きな罪を一人でももう犯さないようなど切実に願う心で、その私の頭にうかんだのは少年院にいる少年たちのことでした。（一日おいて七百円のお金が送られて来た）。この僅かなお金でも彼の優しさのこもっているお金なのだし、これをどこの少年院におくり、花の種や、苗、球根など買ってもらい、やがてその花が咲いた時美しい花を見て少年たちの心が少しでもなごみ、綺麗な花を愛する心が人を愛し自分を愛する心ともなつて更生への第一歩となることができたら私は嬉しい、彼の魂もきっと喜んでくれるに違いない。僅かなお金に私の夢はあまりに大きすぎるかも知れないけれど、私は祈りをこめてどうしてこのお金を送りたいと思ったのです。でも私は少年院がどこにあるかしらない。さてどうしようかと考えた時、先生のお名前とラジオで聞

いたお話を思い出され、お願ひしてみようと思つたわけなのです。……どうぞ私の願いをおきき届け下さいませ。……」

私は、その時以来この病める盲目の婦人の夢と願いができるだけ純粹にすみやかに実現されるように努めてきたわけである。全国いたるところの少年院や不幸な子供の施設にしばむことのない

花をうえたい。公私の生活の時間ができるだけ活用して、ボツボツ、テクテク、花うえをしているのである。それは薄幸の生涯の終りを立派なつぐない（罪の）を清澄な境地のうちに全うした島

秋人への鎮魂（たましづめ）のためであり、わが魂の浄めのためでもあると思うからである。また彼の魂に再生の転機を与えた旧師夫妻の教育愛人間愛の讃歌のためであり、鈴木和子という盲目の婦人の美しき魂への敬仰のためでもあるといつてよい。

今日人ととの出会いが薄れ、まことの愛と眞実が失われていくとき、教育の世界もまことの出会い不在となり、育ての心、眞の母心の失われていく姿を傷ましいことと思わずにはいられない。倉橋惣三先生を憶う心、切なのもそのためである。しかしこの信なき世にも、ここに紹介したような事実があり、そういう人たちもおるということは、人間と教育に絶望しないでよいことを示してくれるようさえ思われる所以である。

最後に、島秋人と和子さんの短歌それぞれ一首ずつと私の好きな安積得也氏の詩の一節を記してこの稿を結ぶこととした。眞実と愛の極みをそこに見るとともに、それこそいつの世にも教育の根源にあるものだと信ずる。

いのち生くる独りの翳り慕はしく 日向に雜草の萌え  
秋されば盲いのわれの目にも浮かぶサルビアは赤く  
スモスは白く

（秋人）

（和子）

はきだめにえんどう豆咲き

泥池に蓮の花が育つ

人皆に美しき種子あり

明日何が咲くか

（「一人のために」より）

（東京家裁判事・お茶の水女子大学）

# 幼児の心のうごきを理解する

篠崎忠男



人間の心はたえずうごいている。とくに幼児の心は一般にうごきがはやい。

幼児の心のうごきには幼児によって個人差があり、その年齢の発達段階に応じた定型的な心のうごきが含まれている。それらについては改めてここに述べる必要は、ないであろう。しかし一方では幼児の心にも柔軟にはうごかぬ部分もある。心のうごきを知るにはこのうごかぬ部分について知ることも重要である。それは精神分析的自我心理学が明らかにした適応機制（防衛機制）の知識が役に立つであろう。幼児のよくもちいる適応機制は取り入れ、同一化、投影、抑圧、固着、否認、取消し、反動形成、置き換え、選択的無頼着などである。

それらのことを考慮に入れて「心のうごき」とは何かと考えてみると、一見して明瞭のようでありながらきわめて漠然としている

ことに気づく。理解しやすいようにおとなの一例をとろう。ある女性が勤め先にいくために駅まで歩くとする。彼女は駅にいくということを心の一部にたえずおきながら、道路上を走ってくる自動車に当たる危険や、通行人とつき当たる危険をさけながら安全を保つて歩いていく。そして心の底には今日勤め先でやるべき仕事をのこと、園長に言うべき用件のことを考えている。このようにことはありうることである。いくつものうごきが併行しているのである。その上ある時は婚約者と今夕会うことに期待の喜びを抱いているかもしれない。他者による理解という点からみると、このような情緒的なうごきは外見からも理解しやすい。

しかし仕事のことや園長に言うべき用件を考えている心のうごきは、何かを思考してゐることは察しうるが思考内容については外からは理解できない。駅に行くという行動は、外からはた

だその方向への歩行を理解できるだけである。危険をさける行動はその経験をもつ人ならこれをほとんどそのまま理解できる。これらのはかに本人自身意識していない無意識の心のうきがある。

さきの防衛機制も無意識にそくする一つなのだが、方法さえ知つていればその多くは理解しやすい一面をもつてゐる。

これで明らかのように「心のうき」は、一つではなくいくつものものが併行しており、情緒のように理解しやすいもの、思考内容のように理解困難のものもある。これらの点はおとなも幼児も程度の差があるだけで共通している。

おとなと幼児の心のうきの差異は、おとなは幼児より心理的に多くのものが分化し複雑になつてゐることであり、さらには自我の統制が進んでいるので、幼児に比してうきがあらわに出ないことである。反対にいうと子どもの心のうきは未分化のものが多く、未発達で、より単純なものが多く、あらわになりがちだということである。よく分化していないのは心の中だけでなく、心と身体もおとなほどには分化していない。その点の理解には身心医学の知識が役立つ。母に叱責されて感情混亂した幼児が久しくおこさなかつたゼンソクをおこすというように、心と身体とはかなり密接に関連しているのである。

「理解」についても考えてみる必要がある。理解するには何を理解するのか。これにはさまざまのものがある。主なるものを

ければ、幼児の興味、関心、要求、思考、情緒、衝動、存在のうきなどである。

つぎに理解のし方であるが、まず知的、理解するし方がある。これにも「あの子は今砂で舟を作つてゐる」というだけの、単純なその時点だけの外面的知的理説もあるが「砂で舟を作つてゐる舟を作つてゐるのは母について何か問題があるのではないか」と象徴的に理解しようとする方法もある。

つぎに感情的、理解がある。これにもたんにあの幼児はいま憎しみの感情でうきしているなどと理解するのは知的理説にそくするものであるが、子どもの感情をまさに同時に感じつつ理解するとすれば、それは共感的理説である。共感的理説に似て非なるものに、反応的感情理解がある。これは幼児の感情のうきを感じることはまさしく感情的理説にそくするものであるが、そのつぎにむしろ同時にその人の感情で反応するのである。たとえば幼児の感情に反発してしまう対抗的、感情的理説、迎合的になる迎合的感情的理説である。さらに存在的理説がある。その幼児を人間存在としてみて、その観点より理解することである。実存分析、現存在分析の中心的部分はこの存在的理説である。新精神分析学のホーナイ学派のノーマン・ケルマンは全人間としての子ども whole

child を理解すべきことを主張しているが、これもまさしく存在的理的理解の一つである。

つぎに理理解の目的について考える。幼児の心理の研究のため、おとなが小説か漫画などの材料にするため、幼児のある能力をとくにひきだすために、幼児を何かに利用するために、幼児自身の教育のためになどさまざまの目的がありうるが、この文脈では当然のこととして教育のためということになる。

理理解の結果どうなるか。知的理理解の結果は知的対策をとりやすくなる。それらはしばしば適切な結果を幼児の教育にもたらす。たとえばある幼児がしばしば反発するのをみて、これはその幼児の自我発達の一時期なのだと知的理理解をえると、つぎにはこの自我発達を助長する対策がとられるのに役立つ。すると自我発達について知らないおとなが、その扱いにくさに感情的に反応するよりはるかに順調に発達する。

反応的感情的理理解は、幼児の感情と同じレベルにありこれをぬけでいい状態であって、教育に有効であるとはいひ難い。共感的感情的理理解は幼児の感情にそくしながら余裕をもつて接しているので教育に有効である。

たとえばいつも好きなものを独占しないと気がすまなかつた幼児が、一つのものを争った友と、そんな時のルールのジャンケンをして負け、泣き出した幼児の残念な感情を共感的に理理解しなが

ら「ジャンケンに負けてあの玩具とれなくてやらしいのね、そしてそれをがまんしようとしたら悲しくなったんだね。でもだんだんそういうことがらくにやれるようになるよ」というような建設的な助言を添えることもでき易くなろう。

ここには幼児を成長的観点よりみる立場が含まれうる。存在的理理解の結果は存在の深みに達する理解によって幼児の存在そのもののうごきが活発化して、幼児自身が自己の生命を生きる方向に益を与えるであろう。

さてつぎに大切なことは理理解するおとの側の問題である。一人の幼児がいてそこに何人かのおとながいる。ある時点の幼児の心のうごきの理解に対しては共通理解もあり、非共通理解もある。後者をもたらすものにはおとの個性的理解でせんのものもあるがその人の乳幼児期以来形成された予隨意的な心の偏りであつて物事の理解を歪めるコンプレックスのようなものもある。

また、その人のもつ考えもありのままみることを妨げる。小学校の「教科の成績」に高い価値をおくる母親は、幼稚園にいる幼児に対しても、その観点からばかりみようとするだろう。教師にとっても程度はちがうが、情況は同じである。教師のばあい、そういう考えのほかに職務という制約がある。詳しくいうと、職務にとらわれる心である。

しかし幼児にはそれぞれに現実に適応し自己実現する能力があ

るのであり、教師が自己的職務上の働きかけを、一つの現実として客観視し、それへのとらわれから脱しうるとき、教師には幼児のありのままの心のうごきを理解する可能性が生まれてくる。

すなわち教師は自分のコンプレックスや考え方、職務上の働きかけや責任というものをじゅうぶん自覚して自分自身と幼児とを客観視する力をもつとき、ありのままの幼児の心のうごきに近づきうるのである。

ここで実例をもつて考えてみることにする。A、B二人の男の子が積木をつんでトンネルを作り、そこを列車がくぐる遊びをした。AがやがてBの列車に自分の列車を衝突させるようになり、それをくり返した結果両方の列車が倒れて「火事になつた」と言って消防車を出動させて消火した。Bもおもしろがつてそれに同じだ。こういう場合があつたとする。これをどう理解するか、前記の三つの理解を試みよう。

まずAには攻撃性があり、Bにはそうされてもひどく反撃的にならず同じでいるので受身的なところがあるらしい。これだけにとどまれば知的、理解であり、必要なら何らかの指導を明瞭にうちだすことが可能になる。Aの攻撃行動に共感しながら、これをありのままに、教師が自分自身の感情や考え方、責任感にとらわれずにみていて、おのずから教師自身の方にAの心のうごきがじかに感じられるようになったときには、それは共感的、理解であり、

それがさらに心の内で分化把握されるならば、知的、理解だけによるよりもさらに適切な指導を可能にするであろう。

Bに対しても同様である。したがつて共感的、理解は、十ぱひとからげではなく、個性的でたえず流動しているものである。さらにAという幼児の人間的存在に教師の眼をおくとき、一人一人の幼児は差異をもち、さまざまの行動や、感情を表出しているが、その底の人間存在としての根源的な部分には、幼いながらものごとをありのままにみる力、ものごとを自ら創り出していく力、年令相応の自ら立つ力、総合する力、成長する力などがひそんでいるのである。

これらについての理解を、存・在的、理解は可能にする。存在的理解によつてこそ、幼児の、たとえば一見破壊的なAの行動の中にも、創造性の萌芽をみつけ育てることができるるのである。

このようにみると私たちが幼児の心のうごきを理解するととき、たんに知的、理解にとどまらず、共感的、理解、さらには存在的理解に至ることが大切であることが明らかになる。その存在的理解に達しうる条件としては、受容的雰囲気、幼児が自分から動ける自由度のあること、幼児の人間的存在について知り、感じ導く人のいることなどが必要である。教師はそのような人になりやすく、またなつてほしい職務にある人の一人である。

# 集団の中で個性をどのように生かすか

(一)

## 小松福三

### はじめに

「集団づくり」ということがいわれる。あちこちの研究会で、この「集団づくり」というコトバを聞かないで帰ることは先ずない。「集団づくり」というコトバそのものを聞くことができないにしても、「集団指導」とか「集団管理」といったコトバや「集団のまとめは……」とか「集団の中で……」といった話は必ず聞かされる。それほどに「集団ばかり」である。まことにけつこうなことのように思える。

しかし、「まことにけつこう」とよろこんでばかりいてはならない現実がそこにはあるようである。というのは、「わたしの園では集団主義の教育をしておりまして……」といわれるその先生が、じつは「集団主義教育」と「集団教育」ということのちがいを存知なくて、『集団主義』というコトバを乱発しているといった事実があるからである。あるいは、集団としてのまとまりをつくることと、管理しやすいクラスにすることとを同一視したり、『従順で没我的態度こそ集団の成員としての資格』とでもいいたげな考えを持っていらっしゃる先生が「集団づくり」というコトバを平気でつかわれている現実がそこにはあるからである。

いずれにしても「集団づくり」は、今日の課題である。その中でも特に、与えられたテーマである「集団の中で個性をどのように生かすか」ということは重要な課題である。

以下、稿を二、三回に分けてこのテーマについての私見を記すわけであるが、なかなかに荷が重く、十分なことが書けるかどうか、まったく自信がない。少なくとも、この課題にせまる一つの糸口、一つの視点をさぐる役割をはたすことができればと思つて



稿をおこしたい。

### “いい子主義”からの脱皮

これは、女教師特有の考え方かどうかは責任を持つていえないが、一般に女教師の中には“いい子主義的教育観”があるようである。

わたしがいう“いい子主義的教育観”あるいは“いい子主義的教育方法”とは何か、ということをとりあえず説明しておく必要がある。具体的には次のようなことをさすのである。

幼稚園の教育現場では、「どこが静かになったかな……、静かにしているいい子たちから渡しますよ」といって画用紙を配る。あるいは、「あなたいい子でしょう。さあ、はやくお席につきましょう」といつて座席につかせる。このようなことがよくある。つまり、おせじを言つたり、おだてたりして教師の思い通りに子どもをあやつつていい現実がある。はみ出す子、ということを聞かない子は、教師にとつては邪魔者となりがちな現実もあるのである。このようなことは、幼稚園や保育園だけにみられる特異な現象ではない。すでにそれ以前において、つまり家庭において、この“いい子主義的教育”がおこなわれているのである。たとえば「おりこうさんだから、そんなバッティーことはやめましょ」「いい子ね、さあ、はやくあとかたづけをしましょ」「いい子、

でしよう。がまんするのよ」「いい子は、そんならんぼうなことばはつかわないのよ」といった具合に、注意したり何かに行動をうながす時の枕詞とし“いい子（ども）”を乱用しているようである。そうして、いつしか我が子を、お行儀よくて、おことばづかいがていねいで、わがままをせず従順で、ひかえめな、いわば没我的封建モラルの持ち主に仕立てていくのである。そのくせ、自分がそういう自主・自立性のない子どもにしてしまったことに気づかないまま、「個性豊かな子どもに育ててほしい」と教師に要求してくるのである。

子どもはもともと、わがまままで、したがつて伸び伸びとした自由さと、自発性や創造性の芽を持っているものである。それが、母親や教師のさまざまなおだてによる方向づけや禁止句的注意、制約によつて、小さな型にはめこまれていくのである。つまり、“いい子”というセパレートラインを没我の姿勢で走るおもしろみのない子になっていくのである。

たとえば子どもの“げんか”でみてみよう。子どものけんかは、ほんとささいなことが原因でおこる。少なくともおとなからみればその原因是ささいでしかない。しかし、子どもにとってはそれが重要なことであることをわたしたちは理解していく必要がある。その子どもは、せいいっぱいの“自己主張”をそこではしているのである。ところが、「けんかはいけません」「いい子

はけんかはしないのです」という一般論で片付けてしまったり、いい子主義的モノサシで評価してしまう傾向がないとはいえないわたしたちの現状である。

以上のように、子どもたちのまわりは、いわゆる“いい子主義”でかためられているのである。したがつて子どもたちは、幼稚の段階から没我的バーソナリティーを持つ子どもとして成長していく傾向となるのである。つまり、個性味のない子どもに仕立てられていくのである。そこで、なにはともあれ、“いい子主義的教育”から、教師自身脱皮していく努力をしなければならないのではないだろうか。

#### “封建思想に支えられる集団観”からの脱皮

前項で記したように、わたしたち教師やおとなには、大なり小なり“いい子主義的教育観”があり、その教育観に立った教育方法を無意識に乱発している現実があるようである。この“いい子主義”的思想をもうすこし分析してみると、「集団と個」とのかわり合についての考え方を知ることもできるようである。

それはひじょうに極端ないい方をすれば、封建思想に支えられた論理である——といえるし、全体主義的論理であるともいえる。なぜならば、先にも多少記したように、“いい子主義”的指針は、「我慢」「自<sub>己</sub>抑制」「謙譲」「憐憫」「主従」「上

意下達」「服従」といった一連のコトバに代表されるような内容であるようである。つまり、「集団」を「全体」としてとらえた、いわば“全体主義”的考え方であり、したがつてその場合の集団に対する個は「没我的個」として位置づかねばならないようである。

わたしは、多くの教師や母親が、意識的に全体主義立場をとっているとは思いたくない。むしろ、未整理な日常的生活感覚から無意識にとつていてる立場だと思いたい。わたしたち日本人は、あまりにも長い年月、封建社会と全体主義的社會に生きてこなければならなかつた。そのような歴史の重みを背負つて。したがつて日本人の生活感覚としては、この封建思想と全体主義的思想とが、岩にこびりついてはなれない苔のようにまつわりついているのである。特に、「男尊女卑」の社会体制の中で育ってきた女性には、この思想が強いようである。幼稚園の教師とて、決して例外ではないのである。

このような教師は、口先では新しい集団像を論じることができたとしても、心底の生活感覚や意識まで近代化され、現代化されているとは決して断言できないのである。少なくともわたしには断言できない。むしろ、わたしが接したことのある幼稚園教師の多くは、古い封建社会の家族主義的考え方支配されすぎているようである。

幼稚園の職員室を見るがよい。そこには、おとなばかりで構成された一つの古い家族がある。封建モラルに支えられた家族集団としか言えない教師たちがいる。園長を家長とすれば、その下に各自の能力や技量、そして特性などとはほとんど無関係に、先輩と後輩という、いつてみれば長幼の序列によつて枠ぎめされた姉妹たちがいる。この世界では、能力のある妹が、創造的な発想をもつて何かをしようとするには有形無形に保守的な姉たちの圧力が加えられる。もしそうではないとしても、「みんな仲良く、すべていっしょに——」といった消極的連帯感や「角を立てるようなことをさげ、すべて円満に——」といった、いつてみれば「以和為尊」という論語的・思想で集団の秩序が保たれようとしている。そこでは、各担任、各教師のオリジナルな実践やユニークな構想による保育プランの作成の保障はないのである。

「幼稚の指導」という保育雑誌がある。この四月号に次のような現場教師の悩みの相談が掲載されていた。

「私は先生として四年目のものですが、私の園はクラス数も多いためか、統一をとるためにカリキュラムがしつかりできております。各学年ごとに毎週打ち合わせをし、次週にやるもののがらい、方法など、チーフを中心決めていきます。ですから、

どの組の進度もいつも同じようになつています。新任の先生にはたいへんやりやすいようで、とくにあせりを感じて苦労する」とをさげ、すべて円満に——」といつた、いつてみれば「以和為尊」という論語的・思想で集団の秩序が保たれようとしている。そこでは、各担任、各教師のオリジナルな実践やユニークな構想による保育プランの作成の保障はないのである。

「出る釘は打たれる」という古いコトバが、集

合の一つの有力なモノサシになつてゐることは疑う余地はないようである。したがつてそのような教師には、個性的、創造的発想によって行動し前進していく子どもを育てることはできないのではないかだろうか。

「集団の中で個性をどのように生かすか」は、子どもの教育の問題とする前に、教師自らの課題とすえていかなければならない。

こともないようですが、何年かたつてきますと、あまりに決められたことが多くて、自分のやってみたいことも時間がなくてできないという不満があるので。もちろんその園にあれば、

その方針にしたがうのは当然のことですが……そして各クラスがばらばらなことをしてたら進度も違ひ教育もかたよつてくると思いますが、与えられたカリキュラムの中で独創性を生かすにはどんなふうをしたらよいのでしょうか？」

このような現実はまだいい方で、もっともひとひどい園が多いとみなければならない。

多少まわりみちにそれた感があるが、このような消極的連帯感や家族主義的円満主義によつて支配されている教師には、弁証法的討論による発展は期待できない。それのみか、このような教師には、子どもたちの集団を高めていく真の論理は存在しないのではないかだろうか。

「出る釘は打たれる」という古いコトバが、集団の中で生きる処生訓として潜在し、子どもを評価し指導する場

—— 15 ——

そして、この課題解決の一つの道筋として、以上記したように教師自らの中にある『封建思想に支えられた集団觀』からの脱皮をはたさなければならぬ。

### わがままな自己主張の許容

教師自らが、教師集団＝職場集団の中で個性を生かした活動ができなければ、どんなテクニックを用いても、子どもを集団の中で個性豊かに育てることはできないであろう。しかし、このことだけに力点を置きすぎると、教育はすべて「教師論」で片付けられてしまう危険がある。そこで、「集団の中で個性をどのように生かすか」について、以下に具体的教育の手立てを中心と考えていくこととする。

結論からいえば、思いきりわがままな自己主張をさせてみよう、わがままを許していく――ということである。

先にも記したように、入園してくる子どもたちは、その家庭にあって、いわば『いい子主義』の教育を受け、集団の中での私は最高の態度、といいうようなセパレートされた考え方を身につけてきている。この現実を、何としても粉碎していかなければならないし、この考え方から解放してやらなければならない。そのためには、かなり思いきった手立てが必要である。

幼稚園にしろ、小学校にしろ、『きまり』、『やくそく』という

のがあって、子どもたちの集団の中での生活には規制が加えられている。そのこと自体、決して悪いことではないし、当然のことである。しかし、その『きまり』や『やくそく』が、あまりにも早期から、しかも無制限に数多く存在している。したがって子どもたちは、『きまり』や『やくそく』というオリの中できゅうくつに生活している。わたしは先ず、この『きまり』や『やくそく』という名のオリをとりのぞき、自由で気ままな世界に放してやるべきだと考える。

入園後二か月ぐらいたったころである。淳ちゃんは『おあつまり』になつても決して部屋にはいっていかなかつた。そして、決まつたように逆にホールの方へ飛んで行き、三輪車に乗つて遊ぶのである。反逆児であり、わがままな行為であり、反集団的な行動である。しかし、淳ちゃんには一つの考えがあつて、あえてこの反集団的な行動をおこしているのである。集団破壊を意図したことではない。教師の度重なる注意に、彼は「だつて、『おあつまり』になつてからがホールであそぶのおもしろいんだもん。だつて、誰もいなさいし、三輪車に乗つてもあぶなくないんだもん……」と、自分の勝手な行動の正当性(?)を説明した。彼は彼なりに一生懸命に現実の条件の中でより楽しく生きるくふうをしているのである。

たしかに淳ちゃんがいうとおり、みんながホールで遊んでいる

時は思つように三輪車を走らせる、ことはできない。かりに走ること

ができたとしても相手にぶつかり、けがをさせたりすることも予測される。そこで淳ちゃんは、一計を案じたわけである。すばらしい着想である。この場合わたしは、なにがなんでもみんなといつしょに部屋に入れようとは思わない。とりあえずの間、そのわがままはゆるしてあげたい。

三郎君は音楽の時間に教師にくつてかかった。というのは、先生が「○○ちゃん」と節をつけて呼ぶと「ハーアイ」と節をつけたことえなければならないことになっていた。ところがこの三郎君は何度呼ばれても「ハイ」としかこたえられない。その段階までは音程が正しくそれなかつたのかもしれない。あまりしつこくその先生が「サブローーチャン」をくりかえすので、たまりかねた三郎君は「ぼくはさつきからおへんじしてよ」とくつてかかつたわけである。節をつけてこたえなければならない音楽活動が、三郎君にとつてはどうしても理解できなかつたのかもしれない。いずれにしてもわたしは、この三郎君の行為はすばらしいものであると思う。正しい音程で節をつけてへんじはしていないにしても、たしかに呼ばれたへんじはしているわけであるし、堂々と「ぼくはさつきからおへんじしてよ」と抗議をしたからである。正確な正当性はない、いつてみればわがままな抵抗、抗議はあるが、この心からの叫びは貴重であり、許容してやらなければ

ばならないと思う。

淳ちゃん、三郎君のような事例に出会わした場合、わたしたち教師の多くは、「おつまりだから止めていらっしゃい」「ひとりだけわがままを言つてはいけません」とか、「『ハーアイ』といふんです。あなたはそれができないのです。もういちど『ハーアイ』とおへんじしてごらん」と、なにがなんでも規定通りにやらせようとする。そして、その子の、いわば心からの叫び、心から願いを理解しようとしている。わたしはこの二つの事例にこのようなわがままは歓迎し、とりあえず許容すべきだと考える。

わたしたちは急いで集団化を考えるきらいがある。集団化への規制をしてしまいがちである。集団化をするための規制は、没我を強いることにもつながる危険性があることを知らなければならない。たとえ集団としてのまとまりができなくとも、真の自由の前提であるわがままを許容していかなければならないと考える。

「わがまま」は、その子の眞の叫びでもある。わがままを大いに出させ、そのわがままを自ら評価できる子に育てていくべきであると考える。

以上のように記すと「わがままは無法につながる」「わがままを許して、どうやって集団化ができるのか」という批判の声が聞こえてくるようである。この点については次号にゆずることにする。

## 二 謙澤上

「保育界の忘れられない人」という題を、編集部から与えられました。

それで考えると、さっそく、頭に浮かんだのが、「倉橋惣三」という名であります。

倉橋先生が、幼児教育者として、幼児心理学者として、いかに深い指導と、ひろい感化を及ぼしたかは、申すまでもありません。大正、昭和期の保育界、保育学界に、先生がおられたこと、または、おられなかつたことを考へると、わが国の幼児及幼児教育の世界はちがつていたのではないかと考え思われるのです。そういう意味において、忘れられない貴い存在だと思うのです。

ところで、保育学者としての、心理学者としての倉橋先生を描くのは、ほかに、その人がありましょう。

私は、ここでは、倉橋先生の専門以外の方面にあらわれたところにふれたいと思うのです。

それは、先生が詩人であったということです。

先生の文章を読むと、どんな短いものからも、必ず教えられるところ、得るところがありますが、同時に、文章そのものにひきつけられます。「咳唾、珠玉をなす」ということばがありますが、先生の文章は、まさにそれに当たると思われます。感想、隨筆はいうに及ばず、論文でも、学説でも、趣きがあり、うるおいがあり、美しさがあります。時には、詩を讀んでいるような気持にさえなります。これは他の追随しがたい先生独特の境地であると思われます。

ここに、二篇をひきましょ。

「B先生の顔は、見る見る蒼白味を帯びてきた。目には、涙がいっぱいになつてゐる。春子が、いつものズルを出しているのである。B先生は、春子のこの卑しい性癖について、なによりも憂いでいるのである。どうにかなおしてやりたいと、始終、苦心しているのである。この次こそ、うんと叱つてもみなければならないとも、いつでも思つてるのである。けれど、その場になると、目の前に、いつものズルイ性癖を見せつけられ

## 倉橋惣三先生

ると、叱言（いじ）とも、矯正法も、どこへかいつてしまつて、ただ、身が立ちすくむようになるのである。B先生は指先きをふるわせながら、急に、春子の手を握った。そして無言のまま、裏庭へ連れていった。そこには、大きな古い樹があった。B先生は春子を押しつけるようにして、自分もその樹の根にすわった。春子はおどろいて目を見張つている。その春子の肩を抱きしめて、B先生は頭を垂れてすすり泣きに泣いた。

（幼稚園雑草より）

「掃き清めて、その一日を待ち受けている幼稚園へ、まず最初の子がにこにことやつてくる。『梅一輪一輪ずつのあたかさ』ふと、こんな古句が思い出される。一人来て、二人来て、だんだんと春めいてくる庭である。ふらりふらりと、あとから来た子。先きに来て遊んでいる子等の、あの群、この群へ誘われて、思い思いのところに、思い思いの春を見つける。『梅おちこち南すべく北すべく』またこんな古句も思い出される。幾つの群が出来、だんだん春めいてくる幼稚園の朝である。それにしても、どこからくるこの春の匂いであるう」

これは、正に無韻の詩というべきでしよう。

想うに、先生は天成の詩人であつたでしよう。その方面へ進まれても、嶄然頭角をあらわして、優に一家を成したでしよう。

先生自身「保育者は詩を解さねばならぬ」と、しばしばいわれたように記憶します。

まことに、詩の心の乏しい、芸術に縁の遠いものは、理想的な保育者とはいえないでしよう。なんとなれば、幼児は詩的であり、藝術的だからです。しかも、その傾向は伸ばされねばならないからです。

倉橋先生は学者であり、教育者でありました。しかしさらに詩人でありました。

# 五歳児の一学期の遊び

鈴木洋子

静岡県は温暖な気候に恵まれてゐるにもかかわらず、県民の体位は他府県に比べて低く、私どもの園のある掛川市は静岡県の中でも低体位地域となつており、幼児の身長・体重・胸囲いずれも全国平均よりかなり劣つています。また園の子どもたちは市街地から来ている子が多く、家庭では、十分な運動をする場所に恵まれていません。こんなことから私どもの園では、幼児の時代から十分に運動をさせて、体位と体力の増進をはかるうと「健康でたくましい子に育てよう」というテーマで昭和四十年以来、幼児の発達段階に則した体育的遊びをくふうして努力してきました。

年少組の三学期頃から子ども（二年保育児）の活動が目に見えて活発になってきて、戸外遊びでも教師がついていくらいの運動量を、らくらくとこなしていくようになつてきました。そして新学期、大きい組になつたという自覚が加わり、ますます張り切つて頑張っています。

どんな遊びでも、はじめは教師が指導しますが、だんだん子どもたちだけで遊ぶことも多くなつてきて、よい天気の日には、戸外で、うずまきじゃんけん、ボールわたしリレー、川とびリレー、はしごくぐりリレー、つかましましっこなど、また雨天の日には、ハンカチ落し、積木とびこじじゃんけん、ボール遊び、なわとびごむとびなど自由に入ったりやめたりして適当に休息をとりながら、かなり長い時間遊んでいます。

子どもは、得意な遊びは張り切って遊ぶが、不得意な遊びからは遠ざかりがちなので、先生も子どもとともに遊び、常に個人個人を観察しながらひとつずつ遊びにかたよらず、いろいろな遊びをさせて、バランスのとれた発達をするように心がけます。たとえば片足跳びのできない子はうずまきじょんけんなどにさそて自然に片足跳びをさせる機会をもつたり、時には一齊に遊ぶ機会を設けて全ての子どもを同じ遊びにふれさせ、個人を知る手がかりにします。

遊んでいるうちに子どもたち同士のルールが出来たり、ルールを守らない場合には、友だち同士で厳しく戒め合い、教師に言われるより強く感じるらしくよく守って遊んでいます。また、遊びを通していろいろの友だちとふれる機会も多く、友だちの範囲が広がり、社会性もぐんと養われるようです。

子どもたちのよろこぶ集団遊びとして、次のような遊びをとりあげています。

### 一、つかましごっこ

#### 遊び方

紅白にわかれ、白組が逃げ紅組が追いかける簡単な鬼ごっこ

です。

つかまつた子は決められた場所にもどり、全員がつかまるまで待ちます。全員がつかまつたら交替します。

ねらい

敏捷性、功敏性、走力を養う。

留意点

- ・子どもは全力で走り、運動量がかなり多いので運動後の十分な休息が必要です。

- ・子どもの興味にまかせて度を過ぎないように注意しなくてはなりません。

- ・運動場の整備には十分気をつけなければなりません。

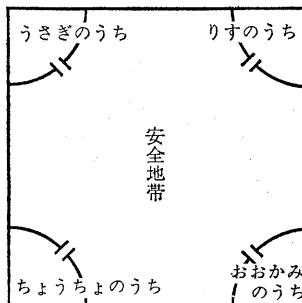
- この遊びは子どもの大好きなものの一つで、天気のよい日には必ず一回は遊びたがりますが、何回やつてもやろうやろうとせがれます。本当に息ぎれがするくらい走りまわるので、頑張る力やひらりと人をかわす能力や走力もほしいぶんついてきました。

- 広い運動場を利用しておおぜいの子が一度に全員で遊べることが何よりよいのです。クラス全員でしたり、二クラスごっこにしたりします。

## おおかみとうさぎ

### 二、おおかみとうさぎ

・周囲の危険物をとり除いておく。



#### 遊び方

うさぎとおおかみにわかれで、うさぎは、家のなかから音楽に合わせて野原へ散歩に出ます。草を食べたり話をしたりしているうちに音楽が止まります。うさぎは大急ぎで家

へ帰ると、同時におおかみはうさぎをすばやくつかまえにきます。つかまってしまった子は、おおかみに食べられてしまつたり、またおおかみの子どもになっておおかみに加勢して手伝つたりして遊びます。慣れてきたら動物の種類をふやし、音楽も変えて複雑にするとより興味深く遊びます。

### 三、積木とびこじじゃんけん

#### 遊び方

一本道鬼ごっここの変型で箱型積木でも、カラーブロックでも適當な間をあけて並べます。紅白にわかれ積木を両足跳びでぴょんぴょん跳びこして、いって両方の子が合った所でじゃんけんをし、勝った子はそのまま進み、負けた子は次の子に知らせ後につく。次の子は急いで跳んできて、出会った所でじゃんけん、これをくり返します。早く相手の陣をとった方が

ねらい

臆病な子は家のまわりばかりで遊んでいて、音楽が止むとすぐ家の中に入りこんでしまい、なかなかつかまらない、興味もうがあるのでフォークダンスや動きのリズムをとり入れて、

ねらい

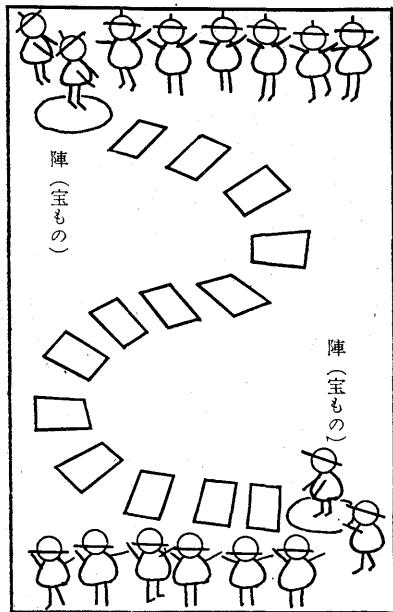
#### 留意点

楽しい雰囲気の中で野原中を使って遊ぶようにさせる。

跳力、敏捷性を養う。

## 積木とびこしじゃんけん

から片づけまで子どもたちだけで全部出来ること、またかなりの運動量なので十人位並んでいても待ち時間が休息となり、この時期の欠かせない遊びの一つです。



### 四、じゃんけん汽車ごっこ

#### 遊び方

はじめはみんな一人の汽車で自由に走ります。音楽が止まるとき汽車と汽車がぶつかってじゃんけんをし、負けた子は勝った子の後へつき二人の汽車になる。二人汽車は好きな方向へ自由に走り、音楽が止まると二人汽車と二人汽車とぶつかり、じゃんけんをし、負けた子は後へつく。これをくり返して次々に四人八人とふえていき、最後には一本の長い汽車になります。はじめは揃ってじゃんけんをする方がよいのですが、慣れてくると音楽に合わせて自由に走り、好きな時じゃんけんをしてふえていくような方法でも遊べるようになります。

#### ねらい

- 調整力、リズム感を養う。

- 点取りゲームになると興味深く楽しく遊ぶことができます。
- 積木と積木の間隔は子どもたちの状態をよく見て決めることが大切です。

#### 留意点

- 一人でずっと逃げまわっていて、最後にじゃんけんをして先

頭になろうとするなど要領のよい子が出てくるので、適当な

助言を与えなければなりません。

・人数がふえていくにしたがって後の方につながっている子どもがふりまわされるので、「運転手さん気をつけてね」

「安全運転お願いしますよ」など、助言を与えてスピードを調整させることが大切です。

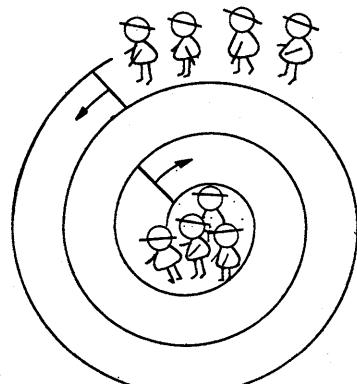
じゃんけんを覚えるとすぐ出来る遊びで、タンブリン等リズム打ちにすると戸外でも遊べます。また一本の汽車になってか

以上のような遊びも一見して運動量が多いように感じるが、教師である私たちは、必ずどんな時にも、個人個人の運動量を考えて活動させ、一日の生活がバランスのとれたものになるようになります。また私たちは、常に身体を健康に保ち、子どもたちの先にたって遊び、子どものように勝った時は大よろこびをし、負けた時は、じだんだぶんでくやしがったりすることが大切だと思います。

(静岡県掛川市立掛川幼稚園)

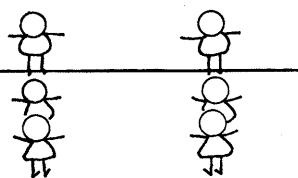
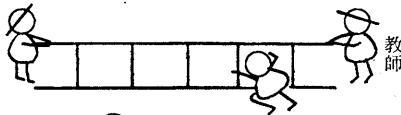
ラリズム遊びに発展させて遊んでもとてもよろこびます。

うずまきじゃんけん



片足とびで進んでいき  
じゃんけんをする

はしごくぐりリレー



- ・一度くぐった場所と同じ場所をくぐってくることを守らせる。
- ・胸のピンなど衣服に注意する
- ・教師は、はしごのところにいて「もっとはやく」「もっと小さくなつて」「ファーワー早いなア」など励ましの助言をしてやると、はやさがずいぶんちがってきます。

# 一学期の遊びから

長谷川美代子



一学期といえば幼児が家庭生活からはなれて、社会生活に入る

第一步と考えられます。子どもひとりひとりの自然の状態、つまり生まれつき、家庭環境・社会環境など、十分に留意しながら、日々の指導目標をたてなければなりません。すなわち子どもの経験や、活動は種々さまざまです。

新入児を対象とした場合、ほとんどがはじめての友だちに接し、友だちあそびが少しずつすんでいくので、この面での誘導が大切に行なわれねばなりません。なお、大切なことは私どもとの接触、親しみ、あるいは集団生活や園のきまり、いろいろの行事への参加の仕方など、指導上の問題はたくさんにあります。これにともなって、私たち教師は新入児の生活の基礎となる目標を、誤らずしっかりとつかんですすんでいかなければなりません

ん。

これを子どもの側から見たり、考えたりした場合、「幼稚園はどんなところ?」と、聞いた時、倉橋先生がおっしゃっておられたように、「幼稚園は大好きなところよ」「おもしろいところよ」「おもちゃやブランコなどたくさんあるところよ」「いい先生やお友だちが、たくさんいるよ」などの答がえられてこそ、本当の幼稚園の姿ではないでしょうか。

入園の初めは、ほんとうに楽しい楽しい所であるという気持をもたせることに、根本的目的をおいて出発しなければなりません。もちろん一学期だけのものではないが、特に本学期に必要であります。これでこそ子どもに安定感を与え、緊張感をほぐしてやることができると思います。

ところが子どもの生活の実状は、千差万別で、たとえば、旧園児に負けず劣らず、すべり台などでむちゅうでおもしろくあそんでいる姿も見られるかと思うと、母や祖母の手を一生懸命つかまえて、はなれそうもない子、あるいは、門まで来て帰りもせぬ入りもせずなんだか不安と警戒でだまっている子、誘つたり言葉をかけると、かえって泣き出す子、無言で旧園児のあとを追つてついていく子、友だちとよくあそんでいると思つてそつとそばから見ていると、ふと泣きだし何やら原因なく手こすらす子などいて、これらは入園当初ならでは見られない情景です。

このような姿を見る時、これらのひとりひとりの原因をよく見きわめ、そしてひとりの子どもの真にふれ合つて、信頼し信頼されるように誘導することが大切で、それは決して軽々しいものであつてはなりません。どこまでも教育の大なるむずかしさと重大さを感じながら、ひとりひとりに適応していくための責任を覚悟して、一生懸命努めなければなりません。

このように子どもの成長は一日たりとも止まることなく、昨日は今日に、今日はまた明日につづいて、五月ともなれば一層に旺盛となってくるわけで、私どもはこのやっとなじみかけて来たひとりひとりの子どものために、十分に注意しながら教師としての適当な指導目標をたて、大いに期待と責任とで努力し、六月ともな

れば青葉しげる下、美しい庭、色とりどりの花の中で、あの道具この玩具を中心にして、友だち同士や私どもの親しい楽しいふれあいで不安も緊張もないただ眞の樂園にする、これを最初の目標としてむちゅうで過ごすわけです。

このような考え方から、ややまとまつたあそびで、最も子どもが喜んだものの一例をとり上げてみました。

### たねまきあそび

人数 農夫になる子ども（数人）と、たねになる子ども（多數）にわける（人数は何人でもよい）

#### 体形

かごめの形で、中にたねになる子どもがしゃがみ、農夫になる子どもは外に立つ。またたねになる子、農夫になる子とに分かれて自由の位置についてもよい。

#### あそびかた

たねの子どもが、しゃがんでいるところへ、農夫になった子どもが歌に合わせて（別記）ひとりひとりの子どもに対して、たねをまき水をあたえる形をする。

しばらくして、たねの子どもは、地上のつもりで頭上へ手を高くさしあげて、だんだんのびていく形をする。

農夫はできた大根人参（注〇季節にあつたもの。野菜、

## 種 莖 の 咽

歌詞

らにこ  
ぶこに  
かに  
根ま  
大き  
人お  
参ひ  
大さ  
かざ  
ぶあ  
らざ  
根を  
大ず  
參み  
人お  
1.  
2.

をら  
ねぶ  
たか  
な根  
さ大  
い参  
ち人  
すす  
まま  
きび  
ひやの  
しま  
まの  
事だ、雷だ、大雨だ)  
等といつて各自、自由  
な所へ逃げてしまう。  
農夫たちは驚いた形で  
追っかけ、にげまわる  
子どもの全部をつかま  
えてくる。(恵一)

果物、花、等。○子ど

の形で

もの自発的創作くふうでえらんだもの。○子どもの経験内のもの)

### 実施後の感想

このあそびは、難しいルールがなく、動作や歌が簡単で親しみやすく、しかも変化にとみ、性別、年齢、経験の有無、組、人員、場所、などにとらわれず、誰でも、難なく参加でき、子ども同士、また、教師と子どものふれ合いが無理なくできて親しみを増すことができる。また各領域（健康、社会、自然、言語、音楽リズム、絵画製作、の六領域）とも関連していて、総合的な教育価値のあるあそびであると思われます。このあそびは、とおり一ペんのあそばせ方で終わるのでなく、くりかえしあそんでいるうちに、季節、その時、その場に応じた子どもの自発表現が生まれたり、教師はそれを助長し、さらにくふう誘導することによって、いかなる方面にも発展的 possibility のあるあそびであると信じます。

# 一学期の幼児の遊びから

長山篤子

## 一学期に、幼児が遊んだ遊びの記録より

一学期に幼児が遊んだ遊びの記録をみますと、私たちの園では遊具を対象とし、全身を動かし、跳んだり、かけまわったり、といった運動遊びに属する遊びが大半を占めていました。この中で

特に、一番好まれたのが、イヤイヤ遊びで、全員（年長も年少も）大変興味を示していました。その他、年少児は、固定遊具（ジャングルジム、タイコばし、ブランコ、スベリ台etc.）を使用した遊び、年長児は、固定遊具を利用した遊び（例えば、ブランコ競争、ジャングルジムを使ったキャプテンウルトラごっこ、鬼ごっこetc.）が多く、飛箱、マットを利用し、ビルわたり、つなわたり、スキー、などの遊びも記録されています。ボール遊びでは年少児の投げたり受けたりする遊びがよく行なわれていました。

その他ごっこ遊びを拾つてみると、入園式の翌日から行なわれた電車ごっこ、電話ごっこ、動物ごっこ、おでんやさん、おふろやさん、色水やさん、円盤んごっこ、動物園ごっこ、乗物ごっこ、おうちごっこ、舟ごっこ、帽子やさんごっこ、つりぱりやさんごっこ、お医者さんごっこ、地下鉄ごっこ、ゴーストごっこ、遊園地ごっこ、動物電車ごっこ、花屋さんごっこ、アイスクリーミやさん、飛行機ごっこ、宇宙ごっこ、大工遊び、ダンスごっこ、製作遊び、粘土なげ、楽隊ごっこ、など、大変種類が多く記



録されています。

★以上のごっこ遊びは、運動遊びと異なり、教師が、きっかけをつくったり、助言を与えたり、ぼんやりしてなかなか遊びにとりつけない幼児に誘いかけをしたりした、教師側の直接の働きかけがあつた遊びでした。クラスごとに室内に入つてのまとまつた活動はほとんどありませんでしたので、以上のようない遊びが主体となつて、一学期を終わりました。

以上の遊びの種類の中より、幼児が一番好きで、毎日した遊びの『タイヤ遊び』と、教師の方で、環境づくりをし、それを利用して、発展させていった遊びの『宇宙ごっこ』を紹介いたします。

### タイヤ遊び

昨年の運動会にかけつけた競争から、子どもたちは、幼稚園の前の道（行きどまりの道）で毎日かけっこ、リレーをして遊んでいた。ただ走ることがつまらなくなると、タイヤ（パンクしたタイヤを自動車工場より六コほどもらってきたもの）をころがして遊びはじめた。四月になると、元気のよい年長男児が、「今度は、僕たちが大きい組になつたからたくさん使えるんだ」と大張り切りで、このタイヤにとびついてきた。（四月下旬）

最初は、五、六名の年長の男児が中心になり、ころがして競争

したり、ころがす練習をしたりしていたが、五月に入ると、タイヤあそびが全体に受け入れられるようになった。

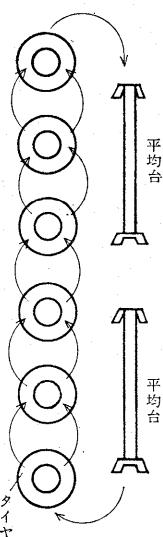
●タイヤをうまくころがすことの出来る男児が集まり、一列になって競争する。雨天の日を除いて、毎日、三十分～一時間半、この競争をする。六月下旬、暑くなりはじめても、毎日お昼近くまでこの遊びに熱中した。メンバーはきまり、八名は必ず入りあと三～四名が出入りする。

●一列に並んでする競争の他、二組に分れてリレーをする。一回ごとにジャンケンで組分けをし、メンバーを変える。

●ブレーキあそび——タイヤころがしで疲れると、個々に、ブレーキあそびと称し、タイヤをころがしていく急に止めるあそびを考える。一定の線の所で、誰が正確にとめられるか競争する。

●タイヤ衝突、二組が向かいあって、タイヤをころがし、ぶつつけ合いをする。

●タイヤをたおして一列にならべ、その上をとび跳ねながらわたり行く。帰りは平均台をわたつてくる。



この遊びは女兒も加わり、時には、レコードを外にもち出し、

レコードのリズムに合わせてはねてわたつていくこともあつた。

(六月上旬) またM子の考えで、タンブリンをもち出して、その

リズムに合わせて、とんで行く日もあつた。年少児は、とぶこと

は出来ないが、穴の中を歩いてわたつて参加する。(合計三十名

くらいの子どもが参加)

● タイヤを三つ重ねて、その上からとびおりる。

● タイヤの上に二人ずつ乗つて手をつなぎ、ジャンプして遊ぶ。

● 鉄棒の下にタイヤをもつていき、鉄棒につかまつてジャンプしたり、鉄棒をまわる。年少児で一人遊びをしたり、二人くらいの友だちで話をしながら楽しむ。

● 円ばんごっこ。年長男児五名、タイヤを円ばんにして、転がしたり、中に入って、かかえ走る。ごっこ遊びとしてはあまり発展しないが、時々円ばん遊びをする。

● 池をつくる。タイヤが池になり魚つりをしてあそぶ。またボートになって、庭をひいてまわり遊ぶ。

以上のようなタイヤ遊びが行なわれた。タイヤは、みんなの人気的になり、二学期、三学期も毎日続けられ、運動会にも用いて競技を楽しんだ。

★ タイヤ遊びを通して話し合われたこと

① タイヤを年長児だけで独占してしまうが、どうしたらよいか。

K 昨年、僕たちもやりたかったけれど、大きい組に入れてもらえなかつた。練習して上手になつてから仲間に入れるから、それまで、がまんしろ。

N 仲間に入れると僕たちの競争がつまらなくなる。僕たちが使つていらない時に練習して。

Y もう少し大きくなないと無理だ。

などタイヤころがしにはどうしても仲間に入れられないとの意見が出た。体力的にも能力的にも、年少児は無理なので、いくつか練習のためにタイヤを貸す。タイヤころがし以外の遊びには仲間に入れるという話し合いになつた。(実際にはなかなか年少児に貸すことが出来ない)

② タイヤ遊びのルールを自分たちできめる。

タイヤのとめ方、競争の仕方、組分け方、ジャンプ遊びの時の順序、タイヤ競争をする時の約束、などを、それぞれのグループできめていた。

③ タイヤの大、小によつて速度が異なることを発見。競争の時は同じ大きさのものを使うか、大小を交互にしてみる、などいろいろなことを試していた。

④ ころがし方の研究、競争をしているグループが集まり、まつすぐにするか、少し斜めにするかなどを話し合う。

⑤ ジャンプをするときは、体操のレコードか行進用のレコードで

ないと、つまらない、などの意見も出る。

### ★教師の話し合つたこと

① タイヤ遊びに夢中になった幼児は、一学期中他の遊びにはほとんど興味を示さなかつた。例えば、母の日のプレゼントをみんなで相談してつくる時など、心はタイヤの方にばかり行き早くこの仕事を済ましてタイヤの方に行こうと落着いて出来ない。(二学期、三学期の半ばまで、ほとんど毎日)

このことに関して、幼児個人個人の検討がたびたびなされた。

興味の持続がどの程度か、しばらく観察する。これにだけ集中していることが活動の片より見ない、いろいろな経験をしていると見ててもよいし、今まで出来なかつた活動を思う存分にしているのだから個人的にはかえつてバランスがとれているのかもしけない。彼らの要求を満たすことのできるような他の遊びも考えてみる。などを話し合つた。(プラネタリウム、大工遊び、三学期には絵を描くことに集中的に興味をもつ)

② タイヤ競争に関しては、グループが固定してしまつがそれでよいだらうか。

他の友だちとの交渉がほとんどなく、いつも同じメンバーばかりで遊んだ。内部でのけんかが起つたり、仲間はずれをつくつたり、他の友だちにいじ悪をしたりするが、教師が、その時その時、中に入り、筋を通して話を聞いたり、助言をしたりして、一

学期の間はそのままのグループにしてみた。(二学期になり、グループが分裂し、また一緒になつたりして、三学期にはおおぜいの友だちが加わり、友だち関係は広くなつた)

以上は一学期を通して遊ばれた遊びですが、次に六月の末に行なわれた遊びを紹介いたします。

### 教師が材料を用意し、幼児が発展させていった遊び

#### 宇宙について

○初夏に入り、夜空を見る機会が多くなつたので、古くからあつた小型プラネタリウムを幼稚園の一室にセットし、星をみせてみよう計画した。

○直径一㍍くらいの大きさなので、星が小さく見にくのであまり関心は示さないだろうが、無理に誘いかけをしないように注意する。

○教師が中にいて、星の説明をしたり、簡単な星型のスライドを写して、幼児に話す。以上のことを話し合い、用意した。

#### 第一回目

三、四人の男児が暗幕がはつてあるので何だろうかと、のぞきこむ。

「何するの」「映画館?」「お星さまをみせてあげようと思つて用意したの」「へー昼なのに」「だから暗くしてあるのよ」「この

星は誰がつくったの」「ほら、円いこの筒に穴をあけて、中に電気を入れると、上にお星さまみたいな光がうつるでしょ」「機械でつくってみたのよ」などの会話がかわされた。

「本当の星は夜、空でみえるわね」

「じゃみんなよんこしよう」

「おーい、星がみえるぞー」

暗い所に入る興味からかおおぜいの子どもたちが集まる。狭くて一度に入ることが出来ないので、一列に並んで六名ずつくらい交代で入ることにした。

#### 室内

「暗くておもしろい」「本当に夜みたい」「星がきれいね」「星がくまにみえるの?」「夜ぼくのうちからもみえるかな」「お空のどこに星があるの」などの質問が出る。

一つ一つに答えながら、機械を操作していると、

Y 「僕に電気つけさせて」

J 「じゃ僕はプラネタリウムのスイッチ」  
……と、自分たちで動かしてみたくなった。そこで順番に係をきめて動かしてみる。

待っている子ども

おおぜいで待つので退屈してしまい、女兒が中心になつて待ち合い室をつくった。イスを並べて順番に坐つて待つている。○子

は切符を作つてきてみんなに渡していた。ホールで遊んでいた、あめやさんの子どもがあめを売りにしたり、楽しそうにしている。順番に三十名くらいの子どもがみると、降園時間近くになつたので今日はこれで閉店にすることにした。

降園前、今日おもしろかったという話し合いの中にプラネタリウムがとりあげられた。

明日もぜひやってみたいとの要望。

- ①機械は、順番に動かし、一人の人ばかりやつてはいけない。
- ②入口に出入をさせる人をおく。
- ③待ち合い室の係をつくる。
- ④切符を売る人をつくる。
- ⑤ジュースやさんやうちわやさんを、あつかったからつくつたらいい。

などの意見があつた。

年少組では、

①お星さまがとてもきれいで明日も次も毎日見たい。夜になつたら本もののお星さまを見よう。

②暗くてこわい。

③待つていろいろがおもしろい。などの発言があつた。

#### 第二回目

登園してきたK、一番にプラネタリウムの部屋にとびこむ。「僕

が「一番」と張り切っている。Y 「僕が二番、係になれたっ」人數が揃うまで機械をいじっていたが、おおぜい揃うと、係の交代をきめて、始めるこにした。女児は切符つくりをしたり店やさんの準備をする。

タイヤ競争のグループも今日は、プラネタリウムにひきつけられる。星は一回説明をきいて、見ればもうつまらなくなるだろうと思っていたが、意外に人気があり、二回も三回も見にくる子どもがいる。

二時間ほど続けてしたが、あまり暑いので閉店にした。

同じような活動がその後三日続く。三日目にとりはずす。

Y 「たのしみにしていたのにどうしてどっちゃったの」

教師 「この部屋本をたくさんおいてあるでしょ、あんまり長くお

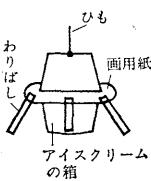
いておくと本を読みたい人に悪いでしょ」

Y 「いやだよ、まだしたいよ」

K 「そうだよ、まだしたいよ」

要望が強いので、またセットしてみた。子どもたちに操作をまかしていると、Y 「そうだ、ここ宇宙にしないか」 K 「おもしろいおもしろい」 「宇宙ステーションが出てきたね」 「宇宙ステー

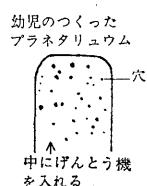
ションつくろうよ」とみんなで製作の部屋へとびこんで行つた。 プラネットリウムをとつて宇宙ごっこにするかどうかを聞き、プラネットリウムは一応とることにした。



Y 「ぼく、プラネットリウムつくる」「そしてステーションをとばそろよ」

児、十五名くらい。アイスクリームの箱を二ツ合わせ中は画用紙で円形をつくる。この日から製作活動に熱中する。ステー

ションをつくった子どもは、年長年少男児、十五名くらい。アイスクリームの箱を二ツ合わせ中は画用紙で円形をつくる。これはAが考える。



暗い部屋でプラネットリウムもつくりてしまふ

しばらく遊んでいたが場所をもつと広い所に移したいとの要望で、この部屋は前の本の部屋に返すことが出来た。興味はステーションをつくることに集中され、宇宙ごっことしてはあまり発展しなかった。

★プラネットリウムに一番関心をもつたのがYで、彼は大変な移り気で、あぱれん坊だったが宇宙ステーションづくりまで、とても本興味をもつてこの遊びには毎日参加していた。家庭に帰つても本物のプラネットリウムをどうしてもみるのだと渋谷まで両親につれていつてもらつたとの報告があつた。

以上、私たちの幼稚園で遊んだ一学期の主な遊びの報告を、させさせていただきました。紙面の都合上、記録を簡単にまとめて記してしまつたところもあり、理解しにくいところがあると思います。

# 保育の過程(三)

津

守

真



子どもを朝、幼稚園に迎え入れて、一日の保育がはじまるが、子どもはそれから何をやつたらよいか、自分の活動を見出していく、それにとりかかるまでに、そこで安心して遊べるような感情の安定を必要とするし、また、いろいろとためしてみる期間を必要とする。これが模索の段階である。

## 二、模索の段階(つづき)

(1) 幼児は、自分の活動の場を見出すのに、いろいろの試みをする。

その日にどんな遊びなら自分ははいりこんで遊べるか、きょううはだれとなら気を合わせて遊べるかを、幼児は、一日の最初の段階でさぐっている。きのう、おもしろく遊んで、きょうもうらうと思っていた遊具は、だれか他の子どもが使っているかもしれない。はじめおもしろそうに思って手にとってみたもの

も、それ以上氣のりがしないかもしれない。そこで、違った材料や違う遊びのところにいってみる。幼児は、あれにさわってみたり、これにふれてみたり、違う遊びに移ったり、落着きがないようにみえる場合がしばしばある。ことにまだ馴れない目新しい場所では、最初は落着きなくあれこれと探索することが多くみられる。また、すでに十分に幼稚園に馴れている場合でも、一日が充実して定着していくためには、模索の期間を経てゆくのである。

たとえば、あるひとりの幼児が、登園してからのしばらくの時間を追ってみよう。

Yは登園してきたが、部屋の入口で立ち止まり、ぶらぶらしている。(Tは保育者、以下同じ) Tが「お早うございます」と声をかけると、すっと入ってき

て、だまつてうなずいて水道の方にいく。(明かに、保育者が声をかけたことにより、次の活動に移っている)

Yは水道で手を洗い、ままごとで遊んでいる子どもを、しばらく立ち止まって見る。(他の子どもの活動を眺め、探索する)

それから、歩いて、すでに数人の子どもが貼り紙をしている机のところに来て、手をついて、

「なにしてんの、おりがみでなにしてんの」とみていると、

T「Yちゃんもやる?」と通りがかりに声をかけるが何も答えない。しかしそこに笑って、隣に坐っているSに何か話をすむ。(隣の子どもたちに興味をもつているが、他の子どものやつている貼り紙には興味を示さない)

(この間、Tは別の机の上に、かにの水槽を出すと、数人の子どもがまわりに集まり、餌をやる。また、Tは部屋の反対側にいき、昨日作ったらしい箱製作の自動車を数台、戸棚の上に並べる。それから、Tはままごとにちょっと入る)

Yの隣で貼り紙をしていたSは、でき上がったらしく、席を立つて保育者にみせにいく。

Sはじきにもどってきて、Yの手をひくと、Yは立ち上がって

Sといっしょに水道について手を洗う。SはYの手をひいて、かにを見に行くが、じきにSは「ゆうぎ室にいこう」とさう。しかし、Yは手を離してかにを見ていていこうとせず、Sのみ部屋を出していく。(Sよりもかにの方が魅力があった)

Tが貼り紙の机のところにきて、貼り紙を机の上においていた子どもの名前を裏にかいていると、YもTについて貼り紙の机にきてTによりかかっている。(Tに対する依存)

Yは黒板の方にいき、いすをがたがた動かしているが、そばにいる子どもが、「ゆうぎしつにいこう」というと、Tが戸口までいき、「雨がふつてるから、ゆうぎしつは気をつけてね」という。

Yは、この声に、さつと廊下にとび出し、他の子といっしょに、手をつないでかけ出し、大声を出していつたりきたりして遊びはじめる。(廊下に出るとこは一瞬間の動きであり、そのときの表情にはひらめきがある。廊下に出て遊びはじめたときの顔つきや、体の動きの活発さは、この前とは全く異った活力がある)

これから約三十分以上、廊下で数人の子どもたちと、いったりきたりして遊ぶ。

この例にみると、子どもが自分の遊べる活動にゆきあたるのには、いくつもの活動をためしてみることが必要なのである。個人により、場合により、この期間の性質は異なるが、活動が軌道にのる前には、このような前段階を伴っている。この期間が保育の過程における模索の段階である。

### (三) 模索の段階では偶然的機会が多くなければならない。

幼児が自分の活動を見出していくためには、幼児が選択できるだけのいろいろの機会が提供されなければならぬのである。それは、物についても、人についても、活動についても言いうるところである。

(1) いろいろの試みが可能になるように、物の種類が備えられてること。

幼児が保育室の中で、あるいは園庭で、自分で手にふれて遊びはじめるのできる物がいろいろと備えられていることにより、いろいろの状況で登園してきた幼児が何かにとりつくことが可能になる。また、だれかが捨てていったり、遊びかけでおいていったものが他の子どもに使用されるようになる。

#### (2) 友人の選択範囲があること。

それぞれの幼児が、気ごころの合う友人を見出すことができるために、ある程度以上の人数の子どもがいることが必要である。

あろう。きのう、いっしょに楽しく遊んだ子どもが、からずしもきょうも気が合うとはかぎらない。そのときには、だれか他の子どもをみつけることが必要になる。

幼児が他の子どものどのようなところに共感を感じて好ましく思うのか。もっと詳細に研究することが必要であろう。

### (3) いろいろの活動が提供されていること。

幼児が実質的にいっしょに遊ぶことのできる集団の人数は、数人から六、七名であろう。ことに、一日のはじめの方では、まだ互いに気持ちがわかりあっていないから、共に遊べる人数は少なくなる傾向がある。

しかも、どの子どもたちと、どのような遊びをしていくことができるか、子ども自身にもはつきりとわかっていないので、最初から身を打ちこめる活動にいきあたらないであろう。たとえば、ママ」とはいって遊びはじめたように見えるある子どもが、ママ」との中にしつくりとはいりこめないでいる。その子どもは、ときどき、まわりで遊んでいる他の子どもたちの方をちらちらと見てくる。やがて、つみきで舟を作っている子どもたちの中に加わって、あそびはじめる。その方が、友だち関係からも、興味からも、その子どもにとつてぴったりするらしく、まもなくその中で熱心につくりはじめる。

このような場合に、すぐわきで、他の活動がいくつも展開し

ていることが、この子どもが自分に合った活動を見出すのに必要な条件になつていて。しかも、前に参加していたグループからぬけることが自由であり、別のグループに参加することも自由であるような、開放的な集団となつていなければならない。

クラス全体からみると、いくつもグループにわかれ、いろいろな活動がなされているようにみえるが、それは交流可能なグループであり、クラス全体が流動的な構造であることが必要なものである。子どもの側からいいうならば、つまらなくなつたら、そのグループからぬけることができ、おもしろいと思えば、他のグループに加わることができ、（子ども同士の間で、いれてあげたり、いれてもらえなかつたりという経験が伴なうことはあるけれども）自分が、きょうはここでやつていこうというぴったりした活動を自分でみつけることができるといせつなのである。

ある幼稚園の例である。クラスの中で、三、四のグループにわかれ、活動がなされていた。一つのグループでは、ゲームごっこをやっており、十数人の子どもの名前が黒板に書いてあって、得点表が作つてある。教師の指示によって順番にやって、一回ごとに教師が得点をつけ、だれが勝つたか負けたかを明瞭にしていく。一時間以上もつづいたのであるが、だれもグルー

プからぬけるものもなく、他のグループからはいる者もない。そのはずで、得点表は教師が整然と作ったものであり、順番に教師が記入していくから、だれかがぬけたり入つたりすることは困難な気持が生ずるのである。そのグループは長時間継続しても、その中に子どもの自發的提案もなく、活動の変化もなく、発展がない。教師が、ゲーム遊びはここまでにしまじょくといったあとは、だれも何をしてよいかわからず、ぶらぶらするか、けんかがはじまるというようになつてしまふ。子どもの活動のグループの間に壁があり、クラス全体に流動性がないのである。こうしてはじめられたグループは、模索の段階には不適当であり、活動の展開、発展にまで導びくことができないのである。

しかし、このようにいつて、模索の段階は子どもの力だけであつるものではない。保育者は重要な役割を果たしている。

模索の段階では、どの子どももはいることができるだけの活動の種類が必要であるが、それは子どもの力だけでできるとはかぎらない。ことに入園当初には、子どもが自らつくる活動の種類は少ないもので、保育者が積極的に、いろいろの活動をやりはじめ、何をしてよいかわからない子どもたちがはいることのできる活動を作つていくことがたいせつなのである。



#### 四 保育者をためす行動があらわれる。

朝、子どもが登園してきて、まだ何をするかをきめることができるないでいるとき、子どもは、何を期待されているのかわからない場合がある。そのようなとき、子どもは保育者の期待をさぐり、自分が活動を許される範囲をさぐろうとする。たとえば、「せんせい——してもいい?」というようなことばが出る。

そのときに、何をしてもいいのですよというように感じられる答えが得られると、それで子どもは自発的な模索の活動にはいる。しかし、そこで保育者の側に、うつかりすると何がはじまるかわからぬといふ不安がのこり、子どもも、してよいのか、してはいけないのかが明瞭でない場合には、子どもは、いろいろと保育者に難題をもちかけたり、わざと困らせるような行動をする。

これは、子どもが保育者とまだ親しい人間関係にはいっていない場合に起こりやすい。したがって、年度の最初や、クラス担任が代わったときには、しばしば起ころうとしている。また、実習生がしばしば当面しなければならない場面である。

模索の段階では、子どもは自分でみつけたことからはじめで、何をしてもよいのだという安心感をもつていることが必要である。また、保育者がそのことを承認してくれるという理解

が必要である。だから、保育者にも子どものひとりひとりのことがよく把握でき、子どもも保育者を理解するようになつたときには、ためし行動はほとんどなくなつていく。子どもにはよくなつとくできない制限や、約束が保育者の側から与えられるとき、子どもは、どこまでやればその制限にふれるかと、いろいろのためし行動を試みることになる。

幼児の自発的な活動は、創造的、建設的な活動に発展することができるものであるという確信をもつことが、保育者の基本的態度として重要である。

#### 五 保育者は、子どもの活動が定着するまでの状況を観察しながら、そこでの子どもの活動の自発的展開が容易になるために、いろいろの保育の技法を試みる。

##### (1) あそびをはじめるための技法

保育者が先にたつて遊びはじめて、活動の種類をひろげておくことは、子どもの選択の幅がひろがるので重要なことである。しかし、子どもが自発的に活動をはじめることが基本であつて、保育者のはじめる活動の牽引力が強すぎて子どもの活動をこなすようになつてはならない。

この初期の模索の段階で、保育者が目立つ提案のしかたをすると、子どもの模索的活動を妨げ、自発性をそこなう結果とな

るであろう。たとえば、大きな声で「○○するものよ」といって、「というようなことをして、みんなの注目を集めような」とは、この初期の段階では適当でないであろう。また、子どもが登園してすぐに、自分で模索するいとまを与えず、「○○しましよう」ときそいかけるのも、次の段階を自発的に展開することを妨げるであろう。

保育者が活動をはじめる場合には、子どもが興味をもちそうで、子どもの能力に合いそうなことを、保育者が自分でやりはじめる。

たとえば子どもの机の上で、紙を切ったり色をぬったりしていると、子どもがよってきて、「なに作っているの」などとたずねる。

保育者の側に明瞭な意図がある場合には、このようにしてはじめられる活動は、後にまでつながる活動の一端となりうる。

しかし、保育者が、そのさきどうなるかわからないで、子どもにもできそうな活動をはじめる場合が実際には多いであろう。

## (2) 遊びからぬけるための技法

保育者が遊びをはじめることによって、子どもの選択ができる活動がふえる。しかし、そこでの保育者の目標は、子どもがそこから発展させてゆくことのできる活動のきっかけをつくること

である。だから、活動が軌道にのつたら、保育者はその活動からぬけることが必要になる。それないと、保育者が子どもを支配したり、あるいは、子どもが依存的になつたりするであろう。

保育者が子どもの活動からぬけるためには、子どもの側からもぬける必要性を感じさせるようにしなければならない。

子どもの活動が充実てきて、保育者の存在をも忘れさせると、ほどになつてから保育者がぬけることは稀であろう。それ以前にぬけるときには、想像のレベルの言語が役に立つ場合も多い。

たとえば、ままごとをしているときにぬけるときには、「おつかいにいってきますから」というようにしてぬけると、子どもはその遊びにとどまっていて、保育者だけがぬけることができる。

この他、模索の段階では、友だちとの衝突や、もののとりあいも多く起りますから、子ども同士の問題解決の技法は、しばしば必要になる。

また、自分がとりかかった遊びの中で、いろいろのことを考えつき、遊びがひろがるようにするための技法も研究することが必要であろう。

## 幼児のためのよみもの(その1)

### 「幼年童話」の問題

本田和子

「西洋にはミスアルコ  
ットの如く殊更に小  
供の読むべき小説を作  
らるるものあればセント  
ニコラスの如く専一に

幼子の慰みに編輯する  
雑誌あり……（中略）

我国には未だ此辺の教  
育に深く注意するもの  
のなきは甚だ残念なる

と也。……（中略）……

故に吾々は先ず母親  
方が其子に語らるる為  
に宜しきを得たりと覺  
ゆるお談しを集め国民  
の元氣を其二葉の中に  
養成するの基ひを作ら  
んと欲す。

因て此後時々かかる  
お談しを附録として本

誌に添へし但し其のお談しは只筋書きを書いて別に文飾せず之  
を面白くもお可笑くもするは母親方御自分の便口に任じ即ち其の  
子の性質によりて法を説くの工夫を為し玉はんことを望むと云  
ふ。」

こんな一文が、明治二一年二月四日発刊の「女学雑誌」第九五  
号に掲載されています。つまり、次号から時折子供向けのお話を  
載せていくという予告文なのです。そして、次号には「子供のは  
なし」という欄が設けられ、その第一回として「一目の婢」とい  
う短い物語が掲載されました。

児童文学の開祖とされている巖谷小波の「こがね丸」にはじま  
る「少年文学」シリーズが刊行されたのは明治二十四年一月、姉妹  
シリーズ「幼年文学」の発刊が同年一月ですから、この「女学  
雑誌」の企画は、幼児のために意図的に物語を提供しようという  
わが国最初の試み、と言えるかもしれません。

そして、興味深いことに、先に引用した予告文にもあるよう  
に、その方針は「お話は筋だけを示すから、後は自由にくふうし  
て、子どもに合わせて話しなさい」というのでした。これは、幼  
年文学の基本的な性格を、はつきりと指摘したものと言えます。  
すなわち、幼年文学は語られる文学であり、語られる文学は必然

的に作者と受容者の間に語り手という媒介を必要とします。

そして、語り手は自分の語りかける対象であるそれぞれの幼児に合わせて、その物語を自由に脚色し直す権利を持つてしまうのです。

確かに、幼児のための物語は、母親とかあるいは幼稚園の先生

というような、直接に幼児と触れ合う保育者たちの手を借りなければ、幼児の世界に入り込むことは困難でしょう。それ故に、その媒介者によってどのような伝えられ方がなされようとも、甘んじてそれに耐えねばならない運命を持っているとも言えます。

作り手と伝え手の関係、ここに焦点を合わせながら、幼年文学の問題を考えてみると、今回の課題としましょう。

「幼児のためのよみもの」という題を与えられているのですが、幼児のために用意されたさまざまの書物は、童話集であれ絵雑誌であれ、あるいは絵本であれ、純粹に幼児が「一人で読むもの」としてとらえることはできないでじょう。

おとなが媒介者として存在し、「読んでやる」「話してやる」这样一个行為をはさまなければ、それらの書物は幼児のものとなり得ないのです。したがって、このような問題のとらえ方をすることも、与えられた表題に對して決して背いてはいないと思うのです。

## ◆ 幼年童話界の現状

児童文学の世界で、「幼年童話」というジャンルが確立したのは、昭和初頭とされています。

童心主義の波に乗って華々しく開花した「赤い鳥」その他の童話雑誌が、大正デモクラシーの退潮と經濟的不況の中に姿を消していくた時、童話発表の場として新しく浮かび上がってきたのが、「コドモノクニ」「子供之友」などの月刊絵雑誌だった、と作家の奈街三郎氏は言っています。こういう絵雑誌に執筆するとなると、何しろ、対象が幼児です。それに絵と並列される物語ですから、内容にも文章にもいろいろな制約がある、ここに幼年童話という一つのスタイルが生まれざるを得ず、新しいジャンルが誕生したというわけです。

事実、この時期には、多くの童話作家たちが各自に獨得のスタイルをくぶうしながら、絵雑誌に短い童話を書き始めています。小川未明の「なんでもはいります」という幼年童話も、「コドモノクニ」に川上四郎氏の絵と共に掲載されたものでした。この童話に関しては、奈街氏らのように「幼年童話の典型」と讃える人と、いぬいとみこ氏らのようにこれを否定する考え方とがあつ

て、議論の分かれるところなのですが、それにしても、勝手のちがう領域で、やさしいことば・短い文章で何を表現しようか、と苦慮している未明の姿が見えるようで興味深く思われます。

こうして、絵雑誌の中で芽生えた幼年童話の中から、画面をはなれ活字だけで独立するものが現われ出しました。いわゆる創作幼年童話集です。

ところで、絵本や絵雑誌においては、絵ことばが、同じウエイトを占めているのがよいものとされています。つまり、ことばが単なる絵の解説であってはならず、逆に絵が文章の補助であつてもならない、ことばと絵が共に語り、絵の物語るもののことばが深め、ことばの伝えようとするものを絵がより鮮明にする、そんな絵本がよい絵本なのです。したがって、絵本の中から芽ばえ、そこで成長しかけていた幼年童話が絵をはなれてみると、内容の稀薄さや单调さが目立つ場合も少なくありませんでした。幼年童話はつまらない、という評価が生じがちだったのも無理ないことと思われます。

そして、児童文学界の主流といわれるような所で、幼年童話の問題が論じられたり、研究の対象としてとり上げられる機会も乏しく、作家たちの間ですら幾分軽視されがちなままに、時間が流れました。最近になって、ようよう幼年文学の不毛性が注目され

出し、研究もされ始めたようです。そして、意欲的にこれに取り組もうとする作家たちも現われてきました。

ところで、このような児童文学界の動きとは関係なく、幼年童話はそのずっと以前から存在し続けてきましたし、現在も存在しています。保育者たちは、幼年童話の不毛を歎くこともなく、作品の乏しさをさほど感じることもなく、幼児たちにさまざまな物語を与え続けてきているようです。

事実、私どもの周囲には、実に多くの物語が幼年童話の名のもとに雑居していて、作品の不足をかこつ余地はなさそうに思えるほどです。昔ばなし、グリムやアンデルセンのようないわゆる古典名作とよばれるもの、現代作家たちや教育者たちの創作もの、翻案もの、あるいは、絵本編集者の手すきびと思われる解説的な文章など、その数は極めて豊富、その性格も多彩です。要するに、対象が幼児であって、「ことば」を主材料とする文化材であれば、それらを幼年童話とか幼児向け物語とかみなしてその中から適当に取捨し選択して、幼児たちに与えているというのが現実の姿ですから、児童文学者たちの間で幼年童話の不毛が問題視されるほどには、保育者たちはそれを感じないのでしょう。同時に、作家たちが意欲的に幼年文学の新境地開拓に取り組んだとしても、その所産が保育者たちの無関心の中に埋没してしまう危険性が少

なくないのです。

作り手と伝え手の間にあるこの大きなみぞは、どうして生じているのでしょうか。このあたりから、先ず問題を掘り下げていきましょう。

#### ◆保育者たちはどのように「童話」を扱うの

でしようか。

保育の場で、「童話を聞かせる」という活動を、非常にしばしばとり扱う保育者たちに、その動機を聞いてみると、「何かを開きさせるのに必要だから」という答えが返ってくることがよくあります。

保育者が童話を扱う場合を整理すると、次のような分類がなされます。  
①あることがらの説明、あるいはそれへの導入として「お話を用いる。  
②ことばの能力を高め、聞く力や態度などを養うための「お話」  
③幼児を静かにさせておいたり、時間のつなぎなどのために用いる。  
④幼児に要求されて、⑤よい作品にふれさせ、物語を愛する心を育てるために。

この中で一番多いのは①の場合、次いで②、③といったところでしょう。これでは童話の扱いが「テーマ主義」に偏るのも当然といえましょう。童話が他の目的に仕えるために道具として用いられる場合が多ければ、結果としては、「テーマ」さえその目的になつていれば他はあまり問題とならない、ましてやその「文学性」など、ということになります。

こうみてくると、作り手と伝え手の間のギャップは、伝え手の側の功利性に帰せられそうに思えます。ただ、ここで、目を作品の側に向けてみましょう。

文学教育が論じられる時、「テーマ主義」の偏向がよく問題とされます。つまり文学作品を「友情」とか「協力」とかの「テーマ」や「モラル」の角度からのみ扱って、あたかもそれらを教え

る素材であるかのようにみなし、それにふさわしい作品のみを選んでいくようないき方が批判されるのです。この「テーマ主義」偏向が、幼児教育の場では、最もはなはだしいのではないでしょうか。

◆「幼年童話」は語られる素材として作られて いるでしょう。

——ぶーくまは、わらうとき、

「ぱーぱー」

といつて、わらいます。

うーくまは、わらうとき、

「うーうー」

といつて、わらいます。

ぶーくまは、りんごがすきです。

「りんご」「りんご」「りんご」

うーくまは、さかながすきです。

「さかな」「さかな」「さかな」――

これは、さとうよしみさんの「ぶーくまうーくま」という作品

の最初の部分です。少し古いものですが、幼年童話の中で大変す

ぐれたもの一つとされています。確かに、読んでいてほのぼの

と楽しく美しく、微風のように心をゆるぶる快さ、のどかさがあ

ります。ところで、この作品は右に引用した一部分からもわかる

ように、詩のようにひびく選ばれたことばの世界から成り立つて

いますから、これを伝えないと作品の持ち味が半減してしまいます

うに思えます。例えば、

――ある所にブーくまとウーくまという仲よし子熊がいました。ブーくまは、ブープーと笑うので、ブーくまと呼ばれていました。ウーくまは、ウーウーと笑うくせがあったのよ――

――こうようにこの作品が語られていつたとしたら、仲よし子熊の可愛い生活童話にはなっても、この作品のニュアンスは失われてしまうようです。つまり、この童話は、吟味された無駄のない

ことばが、よくひびき合って独特の世界を作り上げているところに、一つの価値があるのです。

幼年童話は詩でなければならない、と作家たちはよく言います。短い文章の一宇一句をおろそかにせず、洗練された美しいことばでまとめ上げる、どの一行をとっても子どもの耳に美しくひびく表音性を持っていなければならない、というわけです。そして、そのような努力の所産として、珠玉のような作品が幾つか作り出されてきたのでした。

ただ、これらの作品はそれがことばの藝術として美しければ美しいほど、伝え手にとっては厄介なものになってしまいます。つまり、そのとおりにことばをひびかせようと思えば、丸暗記し、くり返し練習してから子どもの前に立つか、あるいは朗読に頼る以外にないわけですが、そのどちらも保育の現場向きではないわ

けです。筋だけ抜き出して伝えるならば、この「作品」ではなくとも似たようなお話は他にもある、といえるかもしれません。現場の保育者たちの傾向がそもそも「テーマ主義」に偏りがちなところに加えて、作家たちの作品を作り出す努力が、伝え手と触れ合わない次元で、むしろ伝え手には重荷となりそうな方向へと、なされているのですから、作り手の意欲と熱意は仲々幼児のことまでとどいてこない、ということになってしまいます。

幼年童話は、ことばの芸術として、幼児をことばの美しさに目覚めさせ、ことばへの愛やことばへの感受性を高めさせるものとして、もちろん美しくあってほしいと思います。ただ、それが語られるものである限り、語り手のことばとして素直であるように作られていなければ、その美しさを伝えることは困難でしょう。文章そのもの、ことばの一つ一つを忠実に再現し丸暗記しなくても、その美しいニュアンスが伝わっていくような、そんな作られた方がなされていれば、伝え手たちもより積極的にそれに取り組むのではないかでしょうか。

与田準一さんも、ことばの感覚のすぐれた作家です。この人の作品も音楽のようなことばでユニークな表現から成り立っているのですが、その一つに「六つの島」というのがあります。一部分を引用すると次のようです。

——つぎのしまは、いいにおいがします。いろんなはなが、うみのほうをむいたり、そらのほうをむいて、たくさんさいていましたから。

ミルクのおかわり、おはなをどうぞ。おはなはやまほときせんにのって、つきのしまへゆられていきました。

おはなのおかわり、ミルクをのんで、しまのみんなはいつてらっしゃいをしました。

うみのなかをいいにおいのきせんが、ボーボー すすんでいきました。——

これは、いわゆる「ぐるぐるばなし」といわれる形式で、六つの島を順ぐりに汽船が回り、各々の特産物を運んで行くお話です。六番目の島で積んだぼし草が一番目の島の乳牛の餌料になるのでしようと暗示して、お話をいつまでも続くイメージで終わっています。この童話を話し終えた時、一人の幼児がうつとりと目を上げて「あしたの朝、お船はまたあんパン島へ行くのね。牛が待ってるのね」といい、もう一人の子どもは、「ぐるぐるぐるぐる、お船はいそがしいね。ボーボーボー」と手で円を描いてみせました。「童話」のイメージが子どもたちにはつきり伝えられたと言えましょう。もちろん、この文章のとおりに丸暗記して話したわけではないのですが、「ミルクのおかわり、おはなをどう

ぞ」とか「さかなのおかわり、シャッポはいいな」とかいうその島ごとに産物をとりかえる場面で使われている「生き生きしたことば」はそのまま伝えるようにしました。これなどは、内容と文章除が伝えやすくできる上に、ことばのひびきも、そのポイントをつかまえやすくできている作品といえましょう。

同じ与田さんの作品でも、代表作といわれる「きしゃにのつて」は語りにくい作品です。あまりにもことばが音楽的にひびきすぎ、鳴りすぎていて、イメージが描きにくく、語り手としてもどこに焦点を合わせていったらしいのかわからなくなってしまいます。さうしたのにしろ、与田さんの作品にしろ、幼年童話として本当にすぐれたものが多いだけに、それが語り手の語り口にうまくのり得ないということが、しみじみ残念に思えるのです。

### ◆みぞを埋めるために。

何よりも先ず、私ども幼児を扱うものとしては、積極的にいものを与える努力をすること、幼児のために作られ提供されているすぐれたものの存在に、もっともっと目を向けるべきでしょう。手近な所で間に合わせようとのみせず、また、童話とは導入に便利な素材であったり、しつけに役立つ材料だけではないことを、改めて認識し直す必要がありそうです。

作家たちには、幼年童話は語られるものであり、それが主体であることを認識してもらいたいものです。語ることばとして素直にとり入れやすい形で、美しく、格調高く表現されていて、生き生きした内容をもった作品を、もっともと期待せずにいらあません。同時に、私たち自身がもっとことばに対し敏感になることが大事でしょう。美しいひびきを美しく感じとつて、それを自分のことばの中でも美しく再現できるということ、それが「幼年童話の伝え手」に課せられた宿題かもしないのです。

「幼年童話は伝え手によって語られるものである」という宿命を無視しているようにみえる作家たちの態度とに、その原因を求めてみました。

こうみてくると、幼年童話界の問題を克服する手がかりは次のようなどころにあるのではないでしようか。

「幼年童話は伝え手によって語られるものである」という宿命を無視しているようにみえる作家たちの態度とに、その原因を求めてみました。

# 愛珠

## 想い出するままに(四)

中 村 道 子



### (一) 転任前半年の経験

後援会と母の会の、合同役員会の日、審議に提出した、新しい愛珠後援会々則の原案を、総会の保護者一同に手渡して審議してもらひ、全会員が承認して下さったから、自分が在任中の後援会は、この会則で後援を依頼し、私は安心して、日々の保育に専念することができた。

応接室の隣の園長室までには、子どもの声は聞こえない。遠くで遊んでいる声か、それとも付添いの人と語りながら、廊下を歩く声は聞こえても、賑やかに遊んでいる声は聞こえない。先生方の声も全く聞かれない。用事ができても、長い廊下を通らねば逢えないから、実に不便であった。幼稚園で子どもの声の聞こえ

ぬことは、実際に淋しいから、保育室や職員室に近い所へ、机を持つて行こう、宿替えをしよう、決心したのである。  
職員室や保育室に、水道の便や洗面器もあるから、幼児の寝台や衛生戸棚をそのままにして、自分の机だけ移せばよい。もし病児ができた場合は、私がいれば用はたりるし、担任の手を煩わさずに処置ができるから、保育には差支えなくことがすむので安心だと思った。幸い保育室が一部屋空いていたから、私の室に近いのを職員室に替えたのである。

今度の新しい園長室にある一間半の押入の、四枚戸を全部はずし、棚のないのを幸いに、寝台をどんどん奥に押したら、ちょうどはいり、目障りにはならなかつた。職員机が、一つ空いていたから、自分の机と角形につけたら、机上は広くなつて仕事がしやすく、落ち着いてよく手についた。

毎朝各組が一列になって、担任が引率して、皇大神宮に参拝していたが、創立記念日の翌日から、幼児各自が登園の直後、参拝することに決め、一人できることは、なるべく自分ですることに話した。そしてこれと同時に、従来は音楽によって、朝の集合に決めていたが、今後は鐘を鳴らすことにして、そのとき三つ鳴れば朝の集合、撞り半（連続に鳴る）なれば、非常集合とすると、約束し、撞り半はいつ鳴るかわからぬから、よく注意して聞くことをいった。「皆が大きくなつたから、こんなむずかしいことを、おけいこせねばならない、嬉しいでしよう」といつたら、「ハイ」と嬉しそうに、あちこちで返事が聞こえた。

全国の社会状勢は、いつも同じではない、私はこうした団体生活をする者として、子どもながらにも、避難訓練をせねばと思ふ。この日から、幼児の非常集合練習を始めたが、この間、ほめたり、応援したり、喫驚してよい批評をしたり、場所を替えたり、保育中であつたり、午前と午後の二回であつたり、午前中に二回したり、またいく時間も経ていなかつたり、繰り返して、練習した。子どもらの動作も、力強くなり、漸次敏捷になつた。先生方も、よくこれらに合わせて下さつたから、子どもたち自身も喜んだ。

園長室の入口の前に、二、三人の幼児が立つて、じっと私の方を見て、いたから、これに気づいて、手招きして机の前へ呼び、「何をしているの」と笑いかけて問うと、種々おもしろそうに話

してくれた。たまたま用事ではいつて来られた先生が、「ここにいる」と、園長先生が「用ができないから、お外へ行きましょう」といながら外へ連れて行こうとされたから、「私が呼びました」といって、そのままおらせ、二、三日後にあつた職員会の時に、「机の側へ子どもが来た時、私が保育する唯一の時です。それが保育をしている一つだから、こんな時にはそのままにして置いてちょうだいな」と笑いながら頼んだ。また談話研究会の機会をとらえて、お絵描きとか、お外等の例をとつて、無暗に「お」を持つないように注意しましょうともいった。

六月も半ば過ぎたある日、珍しく晴れていた午前十時頃、「広島文理大学の長田新先生が、お越しでつせ」と、奥井のおばさんが取り次いで來たから、私は喫驚して玄関の方へお迎えに出た。

長田先生のフレーベル伝記を読んだり、その他の教育書で、名を知っていたが、直接お目にかかることは、はじめてであつたから、嬉しかつた。着任以来少しづつ読んでいる沿革史と、この園の創設者の一人である滝山監事が、稲葉園長に送つた、自分の記憶を書き綴つた、自筆の和本の沿革史も、読んでいたから、お尋ねになるままを答えた。そしてその昔、資料室にあつた、明治初年の保育関係の古書は、全部遊戯室の二階に、戸棚包み陳列してあつたから、お目にかけたが、先生は「中村さん、すばらしい物があるね」「ハイ、こんな所へ置いては、いけないと思いますから、これらを、倉の方へ持つて行って、向こうの物を、こゝへ置くつ

# 史園圖稚遊

## 緒言

國に史あり名利國も亦史な  
フる（うらぎ）余猶は愛樂幼稚園  
只事に喫り一事多斗當て  
國文を編へて之の事體を貽  
かにせむと思ひて暇なき身

淹山監事、自筆の史園

もりであります」といつたら、先生は笑いながら、「つもりとは何ですか!! 直ぐしなさい、早い方がよろしい」と、きっぱりいつて下さったので、私は嬉しく思い、早く倉を整理して、昔あつたように、そこを資料保存室に、定めようと決心した。それから順を追つて、ご覽になつていたが、壁を背にした戸棚の前に立て、「これは家鳩の遊戲の絵だね」じつとご覽になつて、「この洋装の婦人は松野クララさんだね」「そうです。この丸髷の方は豊田英雄先生で、少し若い蝶々髷の先生は、近藤浜先生のように私は思いました」「ふうん！ そうだろうね」そして隣に並んでいた、幼稚園法の絵をご覧になつて、「二十人の子どもの手技は、二十遊戲を現わしているね」先生が細かいこうしたことまで少しの時間で、ご覧になつていることに驚いた。

先生が、それから次々、ご覧になつている間に、一この南側の戸棚は、このまま倉の一階に入れ、西側には全部取付け押入を作り、一間幅に区切つて、柱と同じ色に塗つて、目立たぬよう美しく作り、高さは窓の下までとして、彩光に注意し、北側にある屋形船の戸棚は、倉の入口は通れないからあのままでし、創設者四人の額もそのままかけ、倉の物を早く入れ替えよう、今日長田先生がお越し下さつて、注意していただいたことは、大切な教えであつて、急いで実行しようとした決心した——。このことを先生にいつて、私はお礼を申した。一通りご覧になつたので全園をご案内した。応接室でお茶とお菓子を召し上がり、暫くご休憩の後、広

島の方へお帰りになった。

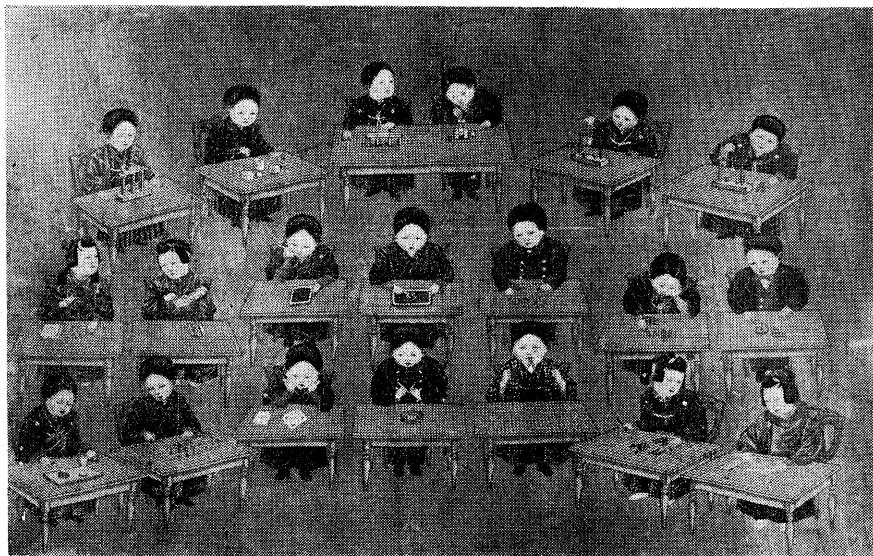


幼稚園の鳩遊び

図・家鳩の遊戯

遊戯場の四方の各方面に、一つずつ気品のある日本画がかかるつて  
いる。正面は申すまでもなく、裏金の絹地に、宮城の絵が描かれ  
ていて横五尺に綱四尺の大きい額だが、全体の半分下は宮城前の  
広場で、松の梢の緑のみと、中央右よりに、正成公の銅像あたり  
の松の繁みを、少し薄くして他は金泥でぼかし、中央から上部にか  
けて、二重橋、多聞櫓、石垣等を、常磐の松が深く包み、微に屋  
根も見えて、画面に陰影があり、幽邃の中に引き入れられるよう  
に、陶然となるものであった。正面に向かった西側の欄干には、  
花咲爺が満開の山桜の幹に昇って、手籠を左に掲げて、桜の枯枝  
に灰をまき、ぱっと花が咲いて、お爺さんが口を開けて笑つたと  
ころであつて、軽快さが現われている。

玄関から遊戯場にはいって、直ぐ目に入る物は桃太郎の図で、  
じつと見つめていれば、莞爾と微笑む無邪気な、しかも勇壮な感  
じを受けるものであった、智仁勇を現わすという、三四の犬、猿、  
雉子は、各々個性を現わして皆可愛らしい。南側の欄干に懸けて  
運動場に向かっているものは、桜井の駅における楠公父子の別れ  
の図で、松の木の下に敷かれた板の上で、父に向かつて両手を仕  
え、訓話に聞き入つてゐる正行を絵描いた物で、これに見入つて  
いるうちに、私は附小の高等一年の時、受持の奈良先生が、歴史  
の時間に、涙ながらに笠置落の所を話され、自分たちも涙を溜め  
て聞いたことを思い出した。



幼稚園法・二十遊戲

これは幼児には少しうまかしいが、私は奈良先生のことを思い出したから、後援会長の長田さんにもこのことを話した。「これらは皆、よい絵ですねア!!、どれも日本画で、まやかし物でないから、見入っていても、厭気がささないからよろしいですわ」「そう思いはりますか、区内に住んではる耕園さんや、耕沖、耕甫、直城さん方に描いてもらいましてん、会長や私たちが相談して頼みましてん」「まあそうでしたか、それは大きにありがとうございました」

最近長田さんとも打ち解けて話すようになり、家族の人たちも、親しきに話しかけるようになったことは、私として嬉しかった。この今橋三丁目の町会長は、長田さんであつて、幼稚園も同じ町会にはいっていた。

今日は七月二十八日である。いよいよ開放保育最後の日であるから、今日から懸案の倉庫の清掃を行なうと計画を立て、地階をはじめ一階二階と順を追うことにしたが、何が出来来るか分らない大仕事であつて、とにかく地階から始めることとした。

一階はときどき校務員が掃除したが、地階には押し込み、押し込みしていたから、手のつけようもなく、ちょっと途方にくれた。稲葉園長時代に、鉄筋に改造せられたとのことを聞いて、いまさらのように、感謝せずに思はれなかつたのである。

頑丈な二段作りの棚の下段に、その頃使われたらしい、幻灯が見えたので、埃を払つてよく見ると、中に東京百景の写真を綿布

で密着させ、回転式になつていて、一景変わるとチーンと鳴るよ  
うになつていて、幻灯でなく覗眼鏡であった。箱の両脇のガラス  
に花の絵が描かれ、他は黒塗で唐草模様をあしらつた美しい物で  
あつた。またこの下に大きい茶箱があつて、中に暗幕がたくさん  
入れてある、幻灯をしていた頃、遊戯室の一階と二階を囲むには、  
これ位は入用だろ。またその隣に列んている中箱から、遊戯劇  
に使つたらしい、衣装の一部と小物の残りなどが出てきた。この  
他、田作りの道具や、児童に試食させた食器も、石炭箱に入れて  
あつた。地下室がこれ位の広さなら、全体の児童も入れられる。  
この頃よく聞く防空壕にて避難する訓練をして、動作を敏捷  
にする訓練もできる。このことは、この園の児童には必要であ  
る。体格は前任校園の子どもらと比べて、愛珠は少し劣っている  
から、これを解消することは、一つの念願であつた。

倉庫の二階には、四方の壁から二尺程間を開けて、大きい広い  
頑丈な、二階式の置棚が中央に、でんと坐つていて。棚の下段に  
ある平たい大きい木箱に、修身図や額にはめ込む絵画を入れ、ド  
イツの有名会社製のバイオリンが和製の物と肩を並べて、各々箱  
に入れられて置かれ、三角の木箱のジャミセンの箱も、この仲間に  
入りをしていた。少し離れて五個入りの茶器の箱も置かれ、組立  
式の勅語奉安殿は、各部をはずしてしまった。棚の下の空間には、  
十三琴や雅楽の琴も、箱に入れられて積まれていた。上段の棚には  
はかしら大小の木箱が置かれている。日常使わない物らしい。

三十年も勤続しているという小使さんに、「これだけ物がある  
なら、整理に大変だったでしょう」といつたら、「よい物はある  
ごわへん!!、愛日の二代目の校長はんになつて、きたない、きた  
ない整理するから何でも皆出せといわれて、遊戯室に一杯出しま  
した。十個揃うた桐の丸胴の火鉢も、ここに掛けてある大きい時  
計も、しまいには毎日見てる時計まで、出せとおっしゃつたが、  
見る物がのうなるよってん、隠しどきましてん。今小使室にあ  
る、あの小さい柱時計がそうですねん。いろいろよい物がありま  
したが、皆その時売りはりましてん。今倉にある物は、がらくた  
ばかりで惜しかつたと思ひますわ」「ふうん!! そうでしたか、  
それは惜しいでしたなア」「今遊戯室の二階にある古い本は、戸  
棚と一緒に米山園長が二階へ上げさしはつたんで、戸棚のない物  
は倉へ片付けましてん」「そうでしたか、よう分りました。おじ  
さんたちは、惜しいと思ひなさつたやろうなア」——私は思つ  
た。きたないといって、あの和本を皆紙屑屋に売らなくてよかつ  
た、残されていてほんとによかったと。

現在一階の倉にある茶箱から、はみ出して周囲に溢れでいる  
書類は、何が書いてあるか分らないが、昔を語る物らしい。たと  
えきたなくとも、一応調べて整理せねば、中から何が出てくるか  
分らないと思つたのである。そのためこの調査は休暇中にすること  
とし、地階を早く清掃して、児童全部がはいれる室にと雑具は  
空いている保育室を提供することとし、運搬を急いだのである。

## 「三重県幼稚園

カリキュラム

### 資料集」を読んで

た上にこのような具体的な日々の積み重ねから生れた指導計画例や指導資料である。

活用する側からいえば、子どもの生活が

つく。

先ずあってそれをどのようにほどみなく流れさせ内容を豊かにするか、教育的な配慮をどうしたらよいか、資料集をよりどころとして独自な肉付けをしながら保育に当たるということになる。

先日ふとこの資料集を手にして、思わず

された幼稚園に来て、そうとも知らず生き

生きと遊んで満足して帰つてゆく。先生は

後片付けをしながら朝からのことをあざやかに思いいかえし丹念に記録する。

保育の骨組を親切に、わかり易く具体的

に示されてるので使い易いし、よい相談

相手になる。三重県としての現代的意義の

この資料集にある具体的な保育の手がかりが自分のものになつてゐる先生は、記録

していくうちに一層子どもへの理解が深く

なり、あらためて反省されて成長する。

三重県幼稚園カリキュラム資料集は教育

要領に示された目標や内容を十分にふまえ

こびや尊さを一層感ずると共に、先生方の努力がきびしく求められていることに気が

たとえば、一日という単位の中に児童にとって必要な望ましい活動が、どのような面からみてもすべてに渡つて含まれていることが望ましいとか、実践記録は児童理解の上に保育の反省の資料にするために、保育の理論化のために、内容のあるものを時

間的経過を追つてひとりの児童もとりこぼしのないように、連続的に記録することが要求されている。

現場の先生にとって、時間的にも体力的にも大変な努力で、それは実践例にじみ出ている。が、常にといわれると現状を考ええてふと溜息の出ることである。子どもの幸せの重さとそれを支える土台を確かなものにするための手引書として大変手ごたえではない。

けれどもこの資料集を手にして真剣に保育にとりくんだ時に、子どもを育てるよ

のある本だと思った。

(高橋滋子)

## 日本幼稚園協会主催

# 幼児教育講習会

本講習会を例年のように開催いたします。ところで本年は、

七月二十四日 幼年期と文学

第二部（午後の部）を新築のお茶の水女子大学体育館で実習

作家 三島由紀夫氏

を主として行なうことにしましたのと、例年のような混雑を

七月二十五日 世界の子どものうた

避けるために、第一部については、会員を前半、後半に分け

東京芸術大学助教授 小泉文夫氏

て、それぞれ入数を制限することにしました。(了承の上、

あるつて御参加ねがいます。

### 第一部 午前の部 九、〇〇～十一、〇〇 講演

前半の部 七月二十二日（月）、二十三日（火）

定員 一、〇〇〇名

後半の部 七月二十四日（水）、二十五日（木）

定員 一、〇〇〇名

### 第二部・午後の部 一、〇〇～四、〇〇 実技

日時 昭和四十三年七月二十二日（月）～二十五日（木）

場所 お茶の水女子大学講堂

七月二十二日 幼児と大脳生理学

東京大学教授 時実利彦氏

場所 お茶の水女子大学体育館  
内容 幼児の創造性を培うあそび

七月二十三日 幼児教育と幼児文化

お茶の水女子大学教授 坂元彦太郎氏

日本女子体育大学教授  
お茶の水女子大学名譽教授

戸倉ハル氏他

会費 第一部 五〇〇円

第二部 (前半・後半のいずれか) 六〇〇円 (テキスト代を含む) なお前半・後半は同一内容です。

会費は当日、会員証をそえてお払込み下さい。

申込方法 お茶の水女子大学附属幼稚園講習会係り

宛名 東京都文京区大塚一の一の一

期限 七月十日まで

方法 往復ハガキ一枚につき一名とし、返信裏面は上の様式

にしたがって記入し、

返信表面には園名と個人名を書いて申し込んで下さい。

注意 ○会費は当日お払込み下さい。

○第一部受講の方は運動に適した服装・靴を用意下さい。

○電話での申込みはおことわりいたします。

宿泊 ○希望の方は、七月十五日までに左記つる家ホテルへ、予約金五〇〇円そえて、直接申込んで下さい。

○第二部参加希望の方は  
④に前半(七月二十一、二十三日)、後半(二十一、二十五日)のいずれ

つる家ホテル 東京都新宿区下宮比町十三

(国電飯田橋駅東口)

四、二十五日)のいずれ

電話東京(160) 三三三六、三三三七、三三三九

れを第一希望とするか明記して下さい。

第二部については、申込みが定員に達した場合は、申込み順に会員を決定して締め切ります。また、人員の都合で、

第一部希望におまわしすることもあります。定員に達した以後の方にはその旨、ご通知いたします。

○復のはがきによって、会員証をおとどけします。

○第一部は、会場の収容定数を超過しないかぎり、当日申込みを受付けますが、第二部は、当日は、申込みを受付

けることはできません。

# 五歳児の記録(13)



## 二学期

### 機部景子

がはじまる。

保育室では子どもたちがメタルをつくりはじめる。

先生も加わってメタルをつくる。

入場券もつくる。

メタルや入場券をつくっている間、他の場所で、リレーや重量あげなどの競技が展開する。

メタルや入場券をつくりながらオリンピックのことをはなししているうちに開会式のことが話題になる。先生は開会式を行なう準備をはじめる。

先生が開会式につかう旗をつくることを提案する。

メタルができるがり、旗がいくつかできあがるころ、先生はブレーヤーを庭に運ぶ。

先生は子どもたちをうながして庭に出る。

子どもたちが庭に並んで開会式がはじまる。

砂場で遊んでいた子どもたちは開会式をしている子どもたちが国歌をうたっているのをきいて集まってきて、オリンピック遊びがクラス全員の活動となる。

オリンピックあそび

—遊んでいるうちに開会式が行なわれることになる—

十月十二日 月曜日 晴

庭

庭ではたいこ橋のところで高とびをしていて、オリンピック遊び

男児六名が、二人ずつ組んで、なわとびのなわで足をゆわえて、

九時十分

二人三脚をしている。

たいこ橋のところで、たいこ橋になわとびのなわをゆわえて、⑩  
◎、⑪、⑫が高とびをしている。

### 保育室

男児五名が箱積木で飛行機の格納庫をつくっている。

女児⑬、⑭、⑮が絵をかいている。

### 九時二十七分

①が先生のところに来る。

①「せんせい、きのう、テレビでみたけどね、きのう、重量あげ  
で、ソ連かったよ」

先生「そうね。うーんとあげて勝ったわね。よろよろとしたわね」

①は庭に出て行く。

①たちのところに行つて、審判員になつて遊びに加わる。

皆でしばらく高とびしていたが、◎は皆がとびおわらないうちに  
なわを高くあげる。

◎がおこる。

①「おこっているから、ひとつ、ばつがつきましたよ」と⑩にい  
う。

遊んでいるうちに、こんどは◎と○がいいあらそ。

皆がごたごたしている。

①が来て、たいこ橋の上に昇つて上からみおろしている。

①「わたし、みているのよ。やねうらで。○ちゃんのおばちゃんが

ふしきにやさしすぎるからわからないわ。あなたがそんなにこわ  
いの？」と○にいう。

①「オリンピックの入場券つくれば？」と⑩にいう。

⑩は①に入場券のことをいわれて、ひとりで保育室に走つてい  
く。

保育室では子どもたちが何人かメタルをつくっている。

先生もメタルをつくるのに加わる。

⑩はメタルをつくっている子どもたちのところに行き、メタルを  
つくりはじめる。

「せんせい、これ、金メタル」といつて、牛乳のふたをみせ  
る。

先生「あっ、牛乳のふたにリボンをつけるといいわ。黄色ぬつて。  
一等賞になつた人に金メタルあげるの」

「リレーは？」

先生「リレーもいいのよ」

「金紙でやつたら、どうかしら」

先生「そうね」

「銅はどうしますか？ せんせい」

先生「銅は茶色だわね」とかんがえる。

先生も子どもたちといつしょになつて、メタルをつくる。

先生「こういうふうにきるのよ。ここにのりつけて。はって。金紙  
いただいてくるわね」と、材料室に金紙をとりにいく。

◎「あつ、そつだ。○ちゃん売る人になつて」  
(入場券を売る人の意)

## 九時四十分

格納庫をつくつていた男児たちはさらに、飛行機と大砲をつくつて戦争することをしている。

先生が保育室に帰つてくる。

先生「一等賞の人は金メタルね」といつて、先生は子どもたちとはなしながらメタルをつくる。

先生「せんせい、重量あげにでも入れていただこうかしら」といふ。

Bがメタルをつくつているところに来る。

B「なにしてるの」

◎「オリンピックよ」

◎は自分の首にリボンをかけて、ちょうどよい長さだけリボンをきりとる。

◎が保育室に入つてくる。

先生はメタルをつくりながら、  
先生「オリンピックはどこではじまるの?」といふ。  
◎「たいこ橋です」

◎が実習生といっしょに①のところにくる。  
◎は①といっしょに車にのつて、実習生におしてもらう。

たいこ橋のところで遊んでいた◎、④、実習生が①のビッビという号令にしたがつて、歩調を整えて保育室にメタルをもらいに来る。

◎「先生も入りたいつていえばリボンメタルつくつてあげる」と先生にいう。

砂場では男児七名、女児二名が遊んでいる。

①がひとりで自動車にのつている。

◎が実習生といっしょに①のところにくる。

◎は①といっしょに車にのつて、実習生におしてもらう。

先生「オリンピックはどこではじまるの?」といふ。  
◎「たいこ橋です」

◎「表彰状つくつたら」と提案する。

先生「そうね、いいわね」

子どもA「一等、二等の台をつくらなくちゃ。箱でくらなきや」と◎は◎にいう。

◎と◎「わたくし、みる人にならせてね」

◎「あつ、そつだ。○ちゃん売る人になつて」  
(入場券を売る人の意)

◎「いや」といつて、リボンでかぎりをつくつている。

◎「先生も入りたいつていえばリボンメタルつくつてあげる」と先生にいう。

先生と子どもたちはオリンピックのことを話題にしてメタルをつくっている。

① たちは石段のところに立って、しばらく保育室の中のようすをみている。

① 「まだ、メタル、できない?」とたずねる。

⑥ 「まだよ。練習していらっしゃいよ」といつて、先生といっしょにメタルにリボンをついている。

先生「金メタルのリボンは水色にする? 黄色にする?」

先生「せんせい、メタル娘になろうかな。しつてる? きれいな着物きて、メタルあげるひと」

(先生はオリンピックに関することがらを積極的に話題にしている。)

① 「わたし、メタルあげる人になる」

① は自分でつくった大きいリボンのメタルを先生につけてもらう。

子どもD 「開会式がないや、このオリンピック」

子どもたちのあいだで開会式のことが話題になる。

① たちはいったんたいこ橋にもどるが、まちきれないで、また、

保育室にメタルをとりに来る。

メタルがもらえないで、また、たいこ橋のところに行く。

先生は庭に出る。砂場に行き砂場のようすを見る。  
先生「オリンピック、どこでやってるの?」といつて、庭をみわたす。

たいこ橋のところに子どもたちがいるのをみて、

先生「あすこらしいわね」といつてたいこ橋の方へ歩いていく。

A は砂場で他の子どもたちが遊んでいるのをみていたが、先生のあとについて、たいこ橋のところに行く。

たいこ橋のところでは、子どもたちがぱつぱつと競技に加わる。

① は子どもたちが入ってくることに他の子どもに紹介する。

① 「M選手が入ったんだって。T選手も」

先生は庭で子どもたちがしている遊びを競技種目として、とりあげる。

先生「体操もあるわね。マラソン、お山、二周? 二周じゃ少ないわね。マラソン三周。先生も入りますよ」という。

マラソンをしていた子どもたちは相当つかれたらしいようすをして走りつづけている。

先生「マラソンはあまりはやく走るとつかれてしまうのよ」

T 「Kちゃんがアメリカで、ぼく、日本」といつて走りつづける。

B は走るのを途中でやめて、三歳児の子どもにたのまれて、自動車を押している。



十時三十七分

先生は保育室からプレーヤーを運んで庭に出ながら、子どもたちをさそる。

先生「さあ、レコードがなりますよ。開会式がはじまりますよ」

子どもたちはみんな庭にでる。

H 「ぼく聖火かかげる人、坂井さん、聖火リレーむかえてあげるの」といつてトーチを持って走っている。

(聖火のトーチは運動会のときにつかつたもの)

メタルを持って、

「ペ、ペー、ペ、ペ、パパペー」といつている子どももいる。

先生「メタルはまだよ。競争してからよ。みんな、ここに、おいとくのよ」という。

何人かの子どもが旗を持って庭に出る。

先生は旗を持っている子どもを先頭にして、そのうしろに子どもたちを並ばせようとする。

これから何がはじまるのか、ようすがよくわからないままわりの子どもをみながら、立っている子どももいる。

先生「オリンピックの開会式がはじまるから、旗のうしろに並ぶのよ」という。

旗を持っている子どもを先頭にして、何人かずつ並ぶ。長い列もあれば、短い列もある。

◎は旗を持ってひとりでぽつんと立っている。

◎のうしろには、だれも並んでいない。

先生は◎がひとりで立っているのをみる。

先生「そう、選手がひとりで参加した国もあったわね」という。

だれかが国歌をうたいだす。だんだんとみんながうたう。

ひとり子どもが石段の一ばん高いところに来て、指揮をはじめると。

砂場で遊んでいた子どもたちは他の子どもたちが国歌をうたつているのをきいて砂遊びをやめて、みんなのところに来る。

国歌をうたいおわる。

H 「聖火台はどこ？」

先生「聖火台はたいこばしのところよ」

H 「ねえ、きみ、さかいよしあきくんに聖火わたす人になつてくれない？」

A 「うん」

H と A はたいこ橋の方へ走っていく。

H はすぐにひきかえしてくる。

H 「いまの、れんしゅう。選手が入ってきて、みんなで歌をうたつて、それから聖火だもの」

子どもたちはがやがやとはなしている。

N 「日本は何番にくるか？」

# I 「九十四番目」

◎「ちょっと待って。みんな四列にならなきゃ」といつて、◎は子どもたちを四列に並べはじめる。

◎がみんなの列に入らないでみている。

◎「せんせい、わたし、ほら、写真どつてるの」

◎「もどどおり」

H 「やりなおし」

先生「やりなおし？ ◎ちゃんも入れていただきたら」

先生「いいですか？」といつて先生はレコードをかける。

子どもたちは立つて、わいわいとはなしている。

①「わたしたち、見物人」といつて、①、D、Sは三人で石段の上からみんなをみている。

①「望遠鏡でみているの」といつて両手を筒状にして目にあててみている。

先生はレコードをとめる。

先生「さあいいですか。したくできましたか？」といつてもう一度レコードをかける。

先生「⑤ちゃんからいきなさい」と、子どもたちに行進するようにな。

先生「さあいいですか。したくできましたか？」といつてもう一度国歌をうたう。

先生「今日の開会式はおわります」といつて、レコードをかける。

先生「ぼく、リレーだよ」などといなながら、子どもたちはばらばらになる。

半数くらいの子どもたちはたいてこ橋のところに行く。

子どもたちは⑤を先頭にして、曲に合わせて歩きはじめる。

各グループとも、旗を持った子どもが先頭になつて歩く。

子どもたちは庭をぐるっと一周して帰つてくる。

先生はレコードをとめる。

◎は行進に加わらないで写真をうつすまねをしている。

先生「Cちゃん『はじめます』って、いたら」とCにいつてCは先生をみていて何もいわない。

先生は子どもたちの前にたつて、子どもたちの顔をみながら、

先生「これから、オリンピックをはじめます。みんな、いつしきょうけんめい、やつて下さい」といつておじぎをする。

H が聖火を持ってたいこ橋のところに走つていく。

H は聖火を持って、たいこばしをのぼつて火をかかげ、おりて帰つてくる。

「火がおちたよ」

「おちても、もえてるつて、おかしいよ」

◎「せんせい、きみがよをうたわないので」と先生にいつて

先生「きみがよが入りますよ」と皆にいつて

皆でもう一度国歌をうたう。

先生「今日の開会式はおわります」といつて、レコードをかける。

先生「ぼく、リレーだよ」などといながら、子どもたちはばらばらになる。

◎「せんせい、見物席つくれば。あそこ、いいじゃない？ Sちゃんのところ」

先生はわらづつを持ってきて、

先生「旗はここにたてておきましょう」という。

子どもたちは旗をたてにくる。

先生「リレーの選手はリレー。重量あげの選手は重量あげって、わ

かれるのね」

K 「こんどは、みんな、ばらばらになって。もう、とめていいわ

よ。レコード」という。

先生は旗のさしてあるわらづつをリボンでかざる。

子どもたちはわいわいといつていて、

E 「アメリカは八十九番目だよ」

⑧はプレーヤーのところに行き、

⑩「リレーをはじめて下さいな」と号令をかける。

先生は①と⑪の姿がみえないでの、子どもの家にさがしに行く。

庭でリレーがはじまる。クラス全員の子どもがリレーに参加す

る。

D、S、M、⑩、⑪、⑫、⑬は走らないで応援をする。

Nは望遠鏡でみるかっこをしている。

はじめは花壇のまわりをまわって出発点にもどってくるリレーだ

つたが、山をまわって庭を一周はじめる。

応援していたDが、

D 「走りたくなったな」という。

子どもたちの中には、同じ方向に向かって走らないで、反対の方  
向に走るものもいる。

先生は走ったら、みんなのうしろにつくこと、いつも同じ方向に  
走ることを子どもたちにはなす。

先生「しつかり、しつかり」といつて、ひとりずつ子どもを応援す  
る。

「スイスのかち、日本のまけ」

といって子どもたちは一団になって保育室に表彰式をしに行く。

表彰式をおわって、

ぱつぱつと子どもたちが保育室からでてくる。

(次は体操がはじまる)

⑧「こんど、体操。選手のひと、あつまつて。『とびあがりまわ  
り』、『さか上がり手ばなし』があるのよ」  
⑪が入場券をみている。

鉄棒のところに一部の子どもたちがくる。

たいこ橋のところに、子どもたちが多勢あつまっている。たいこ  
橋にぶらさがっている子どももいる。

「だんだんむずかしくなるのよ」

「はじめは、おりるだけよ」といつて、子どもたちはたいこ橋  
のところではなしている。

先生もたいこ橋のところに来る。

「せんせい、ストップウォッチではかれば？」

「きょうそうじゃないから、できればいいのよ」

先生は子どもたちがたいこ橋をわたつたり、ぶらさがつたりして

いるようすをみながら、実況放送をする。

先生「T選手、わたりました。次はH選手です」

Tがたいこ橋のいちばん高いところにぶらさがる。

Eが出てきて、Tの体をゆらす。

先生「ゆらしちや、だめよ。E選手」と注意する。

先生「はい、N選手、でてきました」

「よわむし選手」

先生「あら、そんなこといつたら、かわいそうよ。N選手、いつしょうけんめいやりました」

Aが出てくる。  
「Aちゃん、くろいから、黒人選手」と子どもがいう。

先生「こんどは、女子の④選手です。いつしょうけんめいがんばっています」

④は保育室から旗を持ってきて、子どもたちを順番にならべてい

る。  
先生はぶらさがつたまま、おりられなくなった子どもを助けながら、

先生「手のとどくところからした方がいいわよ」という。

皆がオリンピックに夢中になっているうちに、おべんとうの時間になる。

先生「おべんとうがおわったら、また、ここからやりましょうね」という。

「やーまのくみ、おかたづけ」と子どもたちはいいながら、砂場、子どもの家、保育室へと走って行って片づける。

「また、やろうね」

先生「そう、またやりましょうね」という。

十二日は朝から保育室や庭で、重量あげ、メタルづくり、入場券つくり、表彰式、高とび、マラソン、テレビでみたオリンピックのはじる等のオリンピックに関する活動がみられた。ある子どもが「開会式がない」といったことがきっかけになって、先生は開会式ができるように、旗をつくつたり、ブレーヤーを庭の方へ運び出したりする。

先生と子どもが考えを出しあって開会式が行なわれる。クラスの大部分の子どもが開会式に参加して国歌をうたいはじめた。砂場で遊んでいた子どもが国歌をきいて、砂遊びをやめて開会式に参列する。開会式をみていた子どもの中には開会式をみているうちにカメラマンになつたり、見物人になることを思いつくものが出でてくる。クラス全員の子どもが、それぞれの立場で開会式に参加し、開会式がクラス全員の活動となつた。

先生はオリンピックの活動に関して、どのような抱負を持っていたかということと、十二日以前に、オリンピックの活動に直接関係のあつたことがらを取り出すと次のようなものがある。

機部 「先生はオリンピックの活動についてどのような予想をしていらっしゃいましたか」

堀合 「計画としては大きくとりあげるつもりはなかつた。幼児の間から自然と出てきたもので、幼児から出てきた遊びをとりあげて発展させた型。大きくとりあげるには先生の知識もたりないし、幼児も実際にオリンピックを見に行ける人ばかりではない。また、日本で行なわれていて、あるところまで正確に再現しないと幼児の非難をうける。人生のひとつの大きい歴史として幼児時代に残しておきたい」

・九月十四日、先生が運動会の聖火リレーに使う聖火のトーチのをつくる。九名の子どもたちが先生を囲んで聖火のトーチのことが話題になっている（66巻12号59頁）

・聖火リレーがさかんに行なわれる。（66巻12号・60頁、62頁、

67巻1号58頁～62頁、67巻3号67頁～68頁）

・運動会のときいろいろな国の万国旗をつくって（67巻1号65頁～67頁、67巻2号59頁～60頁）いろいろの国の名前を知っている（67巻2号68頁）

万国旗をかいた本が保育室においてある。

・十月九日、先生が新聞のオリンピック版のメタル獲得表を持ってきて子どもたちの机の上においておく。子どもたちが四、五名オリンピック版を開んではなしをする。先生も子どもたちはなしに加わる。そのあと壁にメタル獲得表をはつておく。

・十月十日、先生はオリンピックの予定表を持って「どこにはろうかしら、あしたからのだけれど」とひとりごとをいいながら、はるところをさがし、結局、メタル獲得表のとなりにはる。帰るあまりの時に、今日からオリンピックが開かれるというはなしをする。

#### 実習日

実習生が保育時間中に部分的に参加して、実習する実習日と、実習生が全責任を持って参加する実習日がある。十月十三日、十四日は後者の実習日である。

#### 十月十三日 火曜日 くもり

#### 実習日

まず午前中の先生、実習生、子どものうごきを概観する。

先生は、朝、ちょっと保育室に立ちよるが、その後、先生の姿がみえない。

保育室の窓も庭につづくドアも閉まつたままである。

子どもたちがぼつ、ぼつ、登園しはじめる。保育室に先生がいるので、子どもたちは職員室に行つてみる。職員室にも先生の姿が

みえないで、子どもたちは保育室に帰つてくる。

子どもたちはクレバスや画帳を自分のひき出しから持つて来て、絵をかきはじめる。本を読んだり、保育ブロックで遊びはじめる子どももいる。

庭につづく場所のドアが閉まつていて、庭に出る子どもはいない。

しばらくして、○のクラスのT先生が来て、ドアを開けたり、窓を開けたりする。子どもたちにくつ箱を庭に出すようにいう。子どもたちは、だんだん庭に出ていく。

先生が保育室に入つてくる。間もなく保育室を出る。  
I 実習生とN実習生がふたりで保育室に入つてくる。  
I 実習生は保育室で製作を担当し、N実習生は庭に出て子どもたちと遊ぶ。

先生は花をもつて保育室に入つて来る。先生は花を生ける、それから庭に出る。

庭では砂あそび、マラソンなどがはじまるが長づきしないでじきにやめる。保育室に入つてきて製作をはじめる子どももいる。

子どもたちがつくりたいものを先生のところにいってくると、先生は子どもたちにI先生(実習生)のところへ行つてI先生といつしょにつくるようにという。

先生はI実習生に子どもたちがつくりたいといつてきた事柄をつたえておく。

保育室ではI実習生がペーパーサートをつくる計画を持つている。

I実習生は子どもたちとはなしながら、箸や紙などの材料を準備している。

I実習生はまわりに集まつてきた子どもたちに、

「ペーパーサートをつくりましょう。絵は何をかいてもいいの」という。しかし子どもたちはペーパーサートには興味を示さない。

子どもたちは材料棚から、糸巻きや輪ゴムを出してきたり、空箱を持つてくる。

I実習生の準備した箸や、紙や、自分たちが出してきた材料をつかつて、モーターべーとや、ころがる車や、かめや、落下さんをつくる。

また先日つくった、カラースコープ、をなくして家から練りはみがきの空箱を持って来て、カラースコープ、をつくっている子どももいる。

このようにして、I実習生のまわりで何人かの子どもがいろいろなものをつくりはじめる。どの子どもも熱心につくっている。  
I実習生は子どもの要求に応じて材料をさがしたり、子どもがつくるのを手つだつたりする。

先生が庭をみまわっていると、子どもたちは先生をみつけて、先生について歩く。先生がたいこ橋、つり輪、ぶらんこ、鉄棒と移動するにつれて、子どもたちも移動する。

I が自分でつくりたつり竿を持って先生のところに来る。先生は魚のかつこうをして、泳いでにげる。

先生は庭にガラスの破片をみつけて、ガラスを捨てに行く。先生がいなくなつたあとも魚つりの遊びが少しつづく。

つり竿をつくりたい子どもが何人か出てくる。

先生は木綿糸を持って来て、竿をつくりたい子どもに糸をあたえる。

先生はその後、保育室から庭につづく石段のところにすわって、子どもたちといっしょに、どんぐりに糸をとおす。

先生は実習生や子どもたちを観察する。

先生は子どもたちがはなしかけたり、いつきたことに対しても、いつものように応じていて、先生から積極的になされたことがらない。

おひる近くなつて、ジャングルジムの所で子どもたちはリスや、犬や、熊になつて空想あそびをする。

朝、マラソンがみられたが、その後、オリンピック遊びらしさものはみられない。

I 実習生はペーパーサートをつくるという計画を持つていた

が、子どもたちがいつていてることに耳をかたむけ、子どもたちがいつてることを理解しようとして、子どもたちの要求をうけ入れていた。I 実習生はおちついて製作の準備をすすめていて、I 実習生のまわりにいる子どもたちはおちついて、自分たちがつくりたいと思っていたものをつくることができた。しかし、子どもたちがいつてきたことがらが何であるかわからない場合もあるし、子どもが手つだつてといつた時、子どもが必要としていることが何であるか、子ども自身でできることがどこで、手助けを必要としていることが何であるかをみきわめることはできないで、いっしょうけんめい手つだつて、結局 I 実習生がつくつて、子どもが I 実習生がつくるのをみている場面もあつた。また、いっしょうけんめいつくつている時には子どものがいつてきたことをきく余裕はなかつた。

先生と子どものむすびつきはつよい。実習日でも朝、子どもたちがさがしている人は実習生ではなくて先生であり、何かつくりたいものがあつた時や、ほしいものがあつた時は、子どもたちはまず、先生のところに行く。何か、つくりあげてうれしい時も、子どもたちは、まず先生のところにとんでいく。

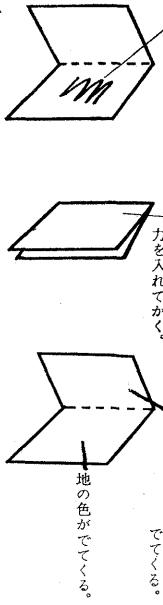
## 保育室

八時四十分

うつし絵をかく 男児五名 女児二名

子どもたちがぱつぱつと登園する。保育室に先生の姿がみえない  
ので職員室に行く。職員室にも先生の姿がみえないので、子どもた  
ちは保育室に帰ってくる。それぞれの子どもが自分のひき出しから  
クレバスや画帳を出してくる。

画用紙を半分に折る。中側の半分の部分に種々の色をつかってク  
レバスで模様をかく。何色もかさねてぬっている子どもいる。ク  
レバスでかきおわると、折り目とのおりに紙を折る。上の部分の紙  
に鉛筆で力を入れていろいろなものをかく。鉛筆でかいた紙の裏の  
面にクレバスの色がうつる。クレバスでかいた面は重ねてぬった色  
の一部分がとれて、最初にぬった地の色が出てくる。  
鉛筆で  
力を入れてかく。  
クレバスの種々の色の線が  
でてくる。  
地の色がでてくる。



子どもたちは、どんな色のどんな絵ができるか、紙をめくってみ  
てはかいていく。

本を読んでいる 女児三名

保育ブロックで遊んでいる 男児三名

Iが登園する。

「今日は十月の何日だろう」といって黒板の日付のかいてある  
ところを見る。

八時五十五分

他の組のT先生が保育室に入つてくる。

T先生は窓を開けたり庭につづくところのドアを開けたりして、  
子どもたちにくつ箱を外に出すようにいつて保育室を去る。

Yは本を読むのをやめて庭に出る。

絵をかいていた男児は絵をかくのをやめて庭に出る。

Yが○といっしょに登園し、手をつないで保育室に入つてくる。

Yは片手に練りはみがきの空箱を持っている。

Yは保育室内をみわたし、それからドアのところに行く。

Yは庭にいる子どもたちをみわたす。

YはMをみつける。

Y「Mどん」という。

Yは遠くにPがいるのをみつける

Y「Pちゃん、おはよう」と大きい声でPに声をかける。

堀合先生が保育室に入つてくる。間もなく保育室を出る。

I実習生とN実習生が保育室に入つてくる。

◎と④が、

「④ちゃん、お外に、行きましょう」と④をさそって三人で庭にかけて行く。

◎はひとあたり庭にいる子どもたちをみわたしてから、

◎「そうだ、④、こういうの、つくるんだった」といつて、手に持っていた空箱を見る。

となりの組の⑧が来て、

「④ちゃん、遊ぼう」というが、◎は、

◎「あっ、そうだ、つくるのだった」といつて保育室に入つてくる。

となりの組の⑧は

「④ちゃん、たいこ橋のところで遊んでいるからね」といつてたいこ橋へかけて行く。

◎はとなりの組の⑧をぶり返つて、大きい声で、

◎「④ちゃんも、いっしょに遊んでいてね」という。

◎は自分のひき出しからはさみを出してきて、いすにすわつて、

練りはみがきの空箱をきりはじめる。

九時五分

◎は練りはみがきの箱を持つたまま、◎とはなじこんでいる。

保育ブロックのところで男児がおおぜい遊んでいる。

◎は堀合先生をさがしている。

◎はどんぐりを三つ持つて庭に出る。◎のところに行き、どんぐりをわたしながら、

「④ちゃんにあげてね」といつて保育室に帰つてくる。

保育室ではI実習生が材料棚にちかい子どもの机の上でペーパーサートの材料を準備しながらTとはなしていい。

堀合先生は花を持って保育室に入つてくる。

OとYが堀合先生に、

「せんせい、何かつくる」という。

堀合先生は、

「I先生といっしょにつくるように」とOとYにはなす。

◎が堀合先生をみつけて、練りはみがきの箱をみせながら、

◎「つくりたいの」という。

I実習生はI実習生にOとYがなにかつくりたがつていいこと、

◎がカラースコープをつくりたがつていいことなどをはなす。

九時十分

I実習生はペーパーサートにつかうための画用紙を切つていい。

I実習生はまわりに集まつて来たT、Y、Oに

I 実習生「ペーパーサートをつくりましょう。絵は何をかいてもいいのよ」とはなす。

T 「おもしろくないよ。つくるのはおもしろくないけど、おはなしするのはおもしろいよな。まえ、つくれたけどおもしろくなかったよ」という。

I 実習生は材料を準備しながらTのことをきいている。

## 庭

九時十五分

砂場でN、K、S、I、E五名が遊んでいる。

穴を掘つて穴の上に二本丸太をさしわたす。バケツに砂と水を入れて、こねてセメントにする。丸太の上にセメントをぬる。

穴につづけて山をつくる。山の上にもセメントをぬる。  
穴を掘つてバケツをうずめる。バケツをうずめたあと砂をもり上げて山にする。

大きい穴を掘つて丸太を五本さしわたして天井にする。丸太の上にセメントをぬる。穴は見えなくなる。管をさしこんで、穴に水をためる。

九時三十分

KはI実習生のところにいるTをみつける。  
KがTをさそう。TはKに応じて、

KとTは石段のところにいる堀合先生のところに行く。

はじめは五人で協力して遊んでいたが、だんだん、それぞれ別ることをはじめる。はじめからのつづきをしているのはEのみになる。

NとKとSは砂遊びをやめて保育室に入る。

## 保育室

I 実習生のまわりでT、Y、Oの三名がきびがらと空箱でモーターボートをつくっている。

Aがひとりで箱積木で格納庫をつくっている。

(B)、(D)、(E)、(H)がいつしょに遊んでいる。

NとKはI実習生のところに行く。  
SはAのところに行く。

N「せんせい、糸まきのから、ない?」とI実習生にいう。  
I実習生はNのいっていることをきいて、首をかしげて材料棚をさがしはじめる。

(I実習生は糸まきのからって何かしらと思う)

N「まえはあつたけど」といてNも材料棚をさがす。  
Nは糸まきを見つけて「動く車」をつくりはじめる。

先生「一等、二等つてするといいわね」という。

T 「せんせい、表彰台つくつておいてね」といつてふたりは走つて庭に出る。

I が堀合先生のところに来て、

I 「つり輪を高くして」という。

先生「はい、はい」といつて先生は庭に出て行く。

九時三十分

⑧は朝から持つていた箱を持って堀合先生のところに行く。先生「I先生がはつて下さるつて」という。

⑧はI実習生のところに行く。⑧は実習生のところに行って、男児がモーターボートをつくつているのをしばらくみている。

⑧はI実習生に、

⑧「せんせい、色がみちょうだい」という。

I 実習生は⑧の要求に応じて色紙を出す。

⑧は色がみをうけとりながら、

⑧「せんせい、何してるの?」とI実習生にいう。

I 実習生「お舟つくるのを、みてるの」という。

I 実習生は⑧をみながらわらう。

S はAといつしょに箱積木で格納庫をつくりはじめる。

⑧、⑩、⑫、⑭が四人で縦に一列に並んでいる。

⑧「年の順にならんで」という。  
みんなが誕生日順に並ぶ。

⑬「背の高さ順に並んで」とまた⑧がいう。

並びおわつて遊戯室にかけて行く。

庭

K はTといつしょに再び庭に出てくる。ふたりでマラソンをはじめる。Dがマラソンに加わる。Eが砂遊びをやめてマラソンに加わる。K、T、D、Eは四人といつしょに走つてマラソンをする。

走つている最中にEとTがぶつかる。

K がふたりの間に立つて、けがをしているかどうかを見る。

K 「血が出てないから大丈夫だよ」という。

次にひとりずつ庭を一周走る。

K がTをよびとめる。

T 「やめた」という。

K とEがバトンを持つて、

「やりなげだ」といながら、バトンをなげなげ、保育室に入る。

(つづく)

(お茶の水女子大学)

真実と愛の極み—教育の根源にあるもの（本号2Pより）の著者である森田宗一氏は、家庭裁判所の判事で、長年、非行少年の問題にとりくんでおられるこの道の長老である。お茶の水女子大学では、久しく、講師として家庭教育を講義してくださつている方である。今回寄せられた一文は、教育の根本精神にふれ、現代の教育界に欠けているものを、鮮明に描き出された、稀に出会う類の文章であろう。いつの時代にも、古今東西を通じて、人の心を揺ぶらすにおかない、人間の心の底にふれるものを、鮮明に描き出された、稀に出会う類の文章であろう。いつの時代にも、古今東西を通じて、人の心を揺ぶらずにおかない、人間の心の底にふれるものを、鮮明に描き出された、稀に出会う類の文章であろう。

に、この文章を読むことのできる幸いを読者とともにわかつたいと思う。そして幼稚園の生活も、六月、七月と時を重ねてくるうちに、幼児の活動も活発になってきた時期である。しかしそれだけに、子どもは自分のしたいことも明瞭になり、希望もつよくなつて、幼稚園の側でそのエネルギーをうけとめきれない場合も出てくるであろう。保育者の側でも、よほどがんばって材料を工夫し豊富にし、また、その場にのぞんで、せつせと身体を動かして幼児の要望にこたえてやらなければならない時期である。活発になってきた子どものエネルギーを、しばることを考えるよりも、いつよになつて、それを建設的な方向に向けてゆくのに力をつくさねばならない。それができない貴い文章であることを感じる。なまなましく、われわれの記憶に残る時期であろう。

## 幼児の教育 第六十七卷第七号

七月号 ◎ 定価八〇円

昭和四十三年六月二十五日印刷  
昭和四十三年七月一日発行

東京都文京区大塚二ノ一ノ一  
お茶の水女子大学附属幼稚園内  
編集兼

発行者 津守 真

東京都文京区大塚二ノ一ノ一  
お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村一ノ一

印刷所 凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーべル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします



いまは

絵を見るだけでもいいのです

雄大なロマンの世界や勇気ある物語が、  
つよい感動の波となって、幼い心に伝わっていくでしょう。――

# 新刊！トツパンの絵物語

ジャングル・ブック こじき王子 火の鳥 トム・ソーサーの冒險  
以下続刊 ● 幼少年むき。園児におすすめください。―― 定価・380円

■有名デパート・書店またはフレーベル館にてお求めください。 株式会社 フレーベル館



このラベルが目じるしです

#### 科学された

園児服が生まれました  
とんだり、はねたり、走ったり、園児の生活リズムはいつも活発。そして、園児特有の体型や心の動き。こうしたことを科学的に考え、調べ、園児服のデザインやサイズに生かしたのがリトルカシミロン NUC 園児服です。今までにない、まったく新しい園児服です。

#### 素材も科学しました

素材はリトルカシミロン。  
よごれても平気な W&W 性、  
軽くて肌ざわりがソフトで、  
しかも丈夫。のびざかりせんいとしてこどものために企画した素材です。楽しい  
デザインが 8 種類。色も園児にふさわしいかわいい色をとりいれました。こんなに細かく気をくばった園児服は初めて。



# リトルカシミロン

## NUC 園児服

**旭化成**

発売株式会社 フレーベル館

くわしくは弊社のセールスマンにおたずねください。